
ソラノヒト

雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラノヒト

【Nコード】

N6155J

【作者名】

雪兎

【あらすじ】

風邪をこじらせ肺炎になり、入院生活を送ることになった猫羽紅。病室を抜け出して散歩をしているときに彼が出会ったモノとは……

序章

数日前、僕は初めての入院生活を体験することになった。理由は簡単だ。病気になったからである。

二ヶ月前ほどから身体が気だるいと思いつつ放置しておいて、つい数日前に立っているのがつらくなったために近くの病院へ行って診察を受けると医者は苦笑いしながら「一ヶ月入院ね。てかよくこんなになるまで放っておいたね」と言ってくれた。

診断結果を親に言うつと父親には馬鹿にされ、母親には笑われた。

父親曰く「いつも女々しいからそんなことになるのだ」との事だ。女々しく生んだのはアンタらだろうが。

母親は「コウちゃんのそういうところもカワイイ」とわけのわからないことを笑いながら言ってくれた。

第一羽 ソラからのお尋ね者

そんなこんなで僕は数日前から退屈な入院生活を送ることになった。

まだ数日なのにこれだけ退屈になっているのだ。

一ヶ月など耐えられるはずがない。

この数日間で学んだことは医師たちにはねらずに部屋を抜け出し、散歩をすることだった。

大抵の場合、元ヤンの看護師、猿渡瑠香さるわたるかさんに捕まってこっぴどく怒られて、頭を叩かれて

「そんなんじゃ治らないよっ」

と言われる。

僕が病人に暴力を振るっていいのかと反発すると

「アンタの病気は肺だから頭は関係ない」

と僕の反発は退けられ、さらにもう一発叩かれてから解放される。

こんな風なやり取りを五日ほどやっても僕は懲りずにまた病室を抜け出し散歩をしているわけだ。

「ふあ……まだ秋なのに寒いなあ」

流石に病院の敷地外に出ることは僕の良心が許さなく、いつもの病院の敷地をぶらついていた。

今までの五日間と変わりなく、周りに見られていないかを注意しながら散歩しているとふと上から人の気配を感じた。

上を見てみると……

「女の子っ!？」

別に女の子がいたから驚いたわけではない。

その子が窓のサッシに足をかけて月を見ていたからだ。

そして次の瞬間、女の子は足に力を入れて空に向かって跳躍した。

長い黒髪は風になびき、綺麗に広がっていった。

「うわぁっ」

僕が思わず声を上げると女の子はこちらを向いてきた。

その目の色は左右が違っていて、吸い込まれそうなくらい綺麗なもので見惚れてしまった。

女の子は空中に数秒いたが、地球が僕たちを引く力に勝てるわけがなく、呆気なく病院の周りの植木の中に落っこちた。

僕は呆気を取られて少し動けなかったが、我に返って女の子が落ちていった植木の辺りまで近づいた。

「大丈夫っ!？」

「いたた……」

植木の中にいた女の子は右腕を押さえながら植木から出てきた。

女の子は小柄で、チビで女々しいと馬鹿にされる僕より一回りほど小さかった。

そんな女の子は痛みに顔を歪めながら僕のほうを見てきた。

「……アナタ、誰？　せつかくソラに飛べそうだったのに」

「え、そんなこと言われても……それよりも医者っ！」

「へーきだから……」

僕は女の子の言葉を最後まで聞かずに病院の入り口に向かって走り出した。

何か後ろで聞こえた気がしたが今は無視だ。

僕が走って病院内に入り込むと容赦なく横からスリッパが飛んできて命中した。

「コウツ！　アンタ、また抜け出し……」

「そんなことより女の子がっ！」

僕の必死な表情を読み取った瑠香さんは僕をスリッパで叩こうとする手を止めた。

「その子はどこだい？」

「向こうっ」

「叩くのは明日にしてやんよっ」

そう言って瑠香さんは僕が走ってきた道を僕より速く駆け抜けていった。

女の子がこちらに向かって歩いていたので瑠香さんはその子をおんぶして小走りで病院内に戻ってきた。

「アンタは部屋に戻ってな。それと走ったから入院一週間延長を考
えときなっ」

瑠香さんは僕をその場に残して向こうの部屋に消えていった。

「……冗談だよね」

僕はとぼとぼと自分の病室に戻り、なるべく自分の名前が書いてあるのを見ないで他の同室の人たちを起こさないように静かに部屋に入って布団に入った。

第二羽 約束

次の日、朝の検査を終えてから瑠香るかさんに呼び出されてナースステーションの前までやってきた。

昨日病室を抜け出した分を叩かれると覚悟して待っているとニヤニヤとしながら瑠香さんが近づいてきた。

「よく不良少年」

「どうかしたんですか？ 不良ナースさん」

「不良はもう卒業したっつーの。それよりアンタ、昨日の子を忘れてはないよな」

「……はい？」

「ソラからの女の子だよ。アンタの頭は三步で忘れちゃう鳥頭かい？」

「それが？」

何故その子が今話に出てくるのかわけがわからない。確かに昨日の夜から気になってはいるが。

不思議そうな顔をしている僕を見ながら瑠香さんが更に聞いてきた。

「コウ、昨日の分の叩きをナシにしてやるっか？」

「は？」

「こっちの条件を飲んでくれりゃナシにしてやんよ」

「……条件つて？」

この人がこんな風にいやらしい笑みを浮かべて出してくる条件だ。割に合わないことを言われて大変な思いをする可能性もあるから僕は警戒をしながら尋ねた。

「簡単なことさね。昨日の子の相手をしてくれりゃいいさ」

「……は？」

思わぬ条件に拍子抜けしてしまった。

ニヤニヤとした笑みを崩さぬまま瑠香さんは僕を見つめてきた。

「ま、あと笹原医師からの伝言は伝えとくわ。『猫羽君は一週間入院延長ね』だと。アタシの読みは当たったね」

僕の面倒を見ている医師のマネで、ない眼鏡を直しながらそんな死刑宣告のようなことを言ってくれた。

「しかし考えてもみなよ、猫羽少年。入院期間が延びたってことはあの子とのふれ合い期間が延びたってことだ」

「う……そりゃそつですけど……」

「それとも今ここで叩かれるかい？」

そう言つて瑠香さんは自分の履いていたスリッパを片方脱いで右手に握つた。

そんな守護霊に般若がついていそつな気迫にビビって思わず僕は無言で頷いてしまった。

その反応を見た瑠香さんは満足そつに頷いてスリッパを履きなおした。

「じゃ、彼女の部屋番号をおしえとくから十時に来なよ？」

「何で十時？」

「アタシが彼女の面倒を見るのが終わる時間と入れ違いになるから監視も兼ねてちよつどいいんだよ」

「……もし行かなかつたら？」

「それはもう……ねえ」

後ろにいる般若が睨みを効かしている雰囲気は瑠香さんの笑顔から感じとれて思わずちびりそつになつたのは秘密だ。

「わ、わかりました。行きますよ」

「よしよし」

ようやく後ろの般若を引つ込めて普通の笑みを見せてくれた。

この人の普通の笑みは綺麗なのになあ……つて言つたら叩かれるだろうな。

「じゃ、頼んだよ」

瑠香さんは僕をナースステーションに放置して特別病棟に消えて
いった。

第三羽 再会

約束の十時になり、瑠香^{るか}さんに指定された特別病棟に向かった。特別病棟は一般病棟とは違い、行き交う人が少なく、自分の足音がよく聞こえた。

目的の部屋の前に着く前に二人の看護師たちとすれ違ったが気にせずに僕は進んだ。

三階の一番奥の部屋までたどり着き、入り口には『空閑那由多』と達筆な字で書かれていた。

「何て読むんだろ……」

とりあえずドアをノックしてみることにした。

すると中から瑠香さんの陽気な声が聞こえた。

僕は失礼しますと一声かけて中に入った。中は綺麗に片付いていて、椅子に腰を下ろしている瑠香さんと、ベッドに上半身だけを起こして座って右腕を吊っている昨日の女の子がいた。

「よぉ〜よく来たねえ」

「そりゃ瑠香さんのお仕置きが怖いですから」

「じゃ、あとは若い二人に任せるから。コウ、手は出しちゃダメよ？」

僕は反発しようとしたがそれを言う前に瑠香さんは立ち上がって手をヒラヒラさせながら部屋を出て行った。

なんともこんな密室で男女二人つきりというシチュエーションは

……

第四羽 契約

「えっと……」

「アナタ、名前は？」

「僕は……言わなきゃダメ？」

「は？ 名前を言わなきゃ誰だかわからないじゃない」

「あんま、自分の名前を言いたくないんだけどなあ……」

「いいから早く言って」

「むう……猫羽紅だよ」

「なんだか……可愛い名前の。自分は空閑那由多」

彼女、空閑那由多は僕が一番言われたくないことを一言目で言うてくれた。

いくら初対面だからって……殴っていいだろうか。

「猿渡さんからアナタの話は少し聞いたわ。不良少年だって。人は見かけによらないわね」

一人で納得するように頷く彼女。

そんな姿もなんとなく絵になって、僕は昨日に引き続き見惚れてしまった。

じっと見つめている僕を不思議に思ったのか赤と青の目で僕のほ

うを見つめ返してきた。

「何？ 顔に何かついてる？」

「い、いや。クガナユタって読んだね。何て呼べばいいかな？」

「何でもいいわよ。空閑さんでも那由多さんでも、何ならアナタが
あだ名をつけても」

「んむう……」

自分が年下なのに候補に上がる呼び方はさん付けなのが気になる
が……

「じゃあ……ナユでいいかな」

「どつぞつ自由に」

「てか、君は僕より年下だよね？」

「それが？ 自分は年齢とかを気にしない主義なの」

一応最低限は気にしてほしいなあ。

そんなことを考えていることなど気にせずになユは勝手に話を進
める。

「で、何で昨日はソラを飛ぶのを邪魔したの？」

「はっ？」

邪魔したもなにも君が勝手に飛んで勝手に落ちただけじゃないか
と思ったが口にはしなかった。
しかしナユには読心術があるのか、心を読んだかのようにムスッ
とした顔をした。

僕が顔に出しやすいだけかもしれないが。

「コウが変な声を出さなかったらあのまま飛べたのよ」

「そんなこと言っただってナユが重力に負けただけだろ」

「そんなことない。昨日は調子がよかったから飛べたはずよ」

「てか初対面なのにそんなこと言わなくてもいいだろ」

「フンだっ」

ナユの見た目には一目惚れしたが、性格は悪いようだ。

左右の色違いの目が力強い意思を持っていて射抜かれそうだ。

「……アナタ、珍しいわね」

「は？ 何が？」

「大体初対面の人は自分の目の事を聞いてくるのにアナタは聞いて
こないから」

「いや、そういうのはあんまり気にしない性格だから。ただ綺麗な
目だな、って思ったくらいかな」

「なっ……べっ別に褒めても何も出ないわよっ」

あ、これっていわゆるツンデレって言うヤツなのか？
今度、幼馴染の翼に聞いてみよう。
まあそれは置いておいて。

「で、そんな初対面なナユが僕に何の用だい？」

「そうね……昨日、邪魔をした責任を取ってもらおうかしら」

「はあ？」

思いもよらぬ答えに、思いもよらぬ声が出てしまった。

「責任取るも何も君が勝手に飛んで勝手に落ちたんだろ」

「だ〜か〜ら〜アナタの邪魔がなければ飛べたのよ。だからこれから自分の言うことを聞いてもらおうわ」

「勝手なっ」

「いいわよ。もし聞かなかつたら猿渡さんにあつたことなかつたことを言つてとっちめてもらうんだから」

「う……」

この性格だ。

「もしも、とてつもないことを溜香さんに言われたら僕の命はないぞ。」

「しかしこんなヤツのわがままを聞くととんでもないことになりそうだが……」

「どじするっ。」

「わ、わかったよ。僕は何をすればいい」

僕は瑠香さんに殺されることを恐れて仕方なく従うことにした。幼馴染たちにこんな姿を見られたら「お前は忠犬だな」と言われそうだと。

昔、怪しげな占い屋に「前世は犬です」なんぞ根拠のないことを言われた。

どちらかって言うと猫に似ていると思うけど。

「初めから素直にそういえばいいのよ。じゃあまずは何か面白い話をしてよ」

「は？」

「ここ、毎日退屈なのよ。だから面白い話」

いきなりそんな無茶なことを言ってきましたか。

僕も同じ入院生活をしているってことを知らないんですかい。

まあ入院生活といっても本日で一週間ですが。

「じゃあ面白いかわからないけど……」

とりあえず僕の近状などを話してみた。

ナユは特に文句などは言わないですつと僕の話の聞いてくれた。自分のことをこんな風に人に話すのは久々な気がする。

翼とはよく話しているけど悩み相談がメインだ。

第五羽 我侏

そんなこんなで三十分ほど話して話題が詰まるとナユが口を開いた。

「なんか変な人生を送ってるわね」

「そういう君はどうなんだ？」

「自分？ 特にないわよ。生まれてからすぐに両親が離婚して母親に引き取られて、三才のころから入退院を繰り返しているつまらない人生よ」

「な、なんか大変だなあ」

これはタブーな話題だったかな。

少し顔を曇らせながらそう答えるナユを見て申し訳ない気持ちに襲われた。

「ま、気にする必要はないわ。あんまりお母さんもお見舞いに来ないし」

「……じゃ、じゃあ僕が毎日来るよ」

「は？」

驚いた顔でナユが僕のほうを見つめてきた。

そんなに変なことを言っただろうか。

逆に僕が不思議そうな顔で見つめ返すとナユは呆れ顔になった。

「本当に呆れるわ。これだけキツく接しても毎日来るだなんて」

「だってナユは毎日つまらないんだよね？ 僕も暇つぶし代わりになるし。一石二鳥だからさ。ダメかな？」

「べ、別にダメとは言わないけど……」

「やったっ」

うれしきで思わずガッツポーズをしまい、ナユの顔がさらに呆れたような顔になった。

そんな感じで話をしているとドアがノックされて中からの返事を待たずに瑠香さんが中に入ってきた。

「はいよ。もう昼の時間だからコウは戻りな」

「あ、はい」

僕が戻ろうと立ち上がると後ろから止められた。

「ちょっと待って」

「ん？どうしたの」

「……アナタのせいで右手を骨折したから責任とって食べさせて」

「……」

「ハハツ。そりゃいい考えだねえ」

ナユのとんでもない提案に瑠香さんが笑いながらその提案に乗ってきた。

そして僕の反論を聞く前に自分の持っていた食器を僕に渡してきた。

「んじゃあとはよろしく〜アンタのはこっちに持ってきてやるよ」

「ちよっ……」

そう言って瑠香さんはさっさと部屋を出て行ってしまった。

「……」

「ほら、こっちに来て」

ナユはポンポンと自分のベッドを軽く叩いた。

そこに座れという意味なのだろうか。

流石に気が引けたので隣に置いてある椅子に腰を下ろした。

「そこじゃ食べにくいからこっち」

僕のささやかな抵抗もナユには意味がなかったようだ。

渋々腰を上げてナユのベッドに腰を下ろした。

簡易テーブルを出してそこに瑠香さんから受け取った食器を置いてスプーンを取った。

「……はい」

「あ〜ん」

僕が差し出したスプーンを何の抵抗もなくナユは口に含んだ。
この子には恥ずかしさとかないのだろうか。

「んむんむ」

口をもぐもぐと動かして食べ物を飲み込むと再び口を開けて料理を求めてきたのでまたスプーンで与えた。

半分ほど食べ終わったところで溜香さんが僕の分の昼食を持ってきた。

なぜか溜香さんの表情はにやけたままだった。

「お、今日はちゃんと食べてるねえ」

「んむ」

「じゃ、コウのはここに置いとくからちゃんと食べなよ」

「へ〜い」

僕は曖昧に返事をしてからナユにスプーンを差し出した。

ナユも気持ちがいいくらいにどんどん食べていって残りはほとんどなかった。

ナユに全部食べさせ終えてから僕は自分の食事でありついた。
僕が食べている間、ナユはじっと僕のほうを見つめていた。

「んぐ……見られてると食べづらいんですけど……」

「んん〜気にしない気にしない〜」

ニコニコしながら彼女は僕から視線を外さなかった。

食べづらいまま何とか全てを食べ終えて、食器を一つにまとめた。

「よし。食べ終わったわね」

「んむ」

「じゃあこの本を買ってきて」

「はいっ?」

ナユはそう言ってベッドの脇の棚の中から紙切れを取り出し、僕に渡してきた。

それを受け取ると紙には何かのタイトルらしきものが羅列されていた。

「あの〜……僕も入院している身なんだけど」

「それが?」
「コウは自分のわがママを聞いてくれるんでしょう?」

「そうは言ったけど……」

限度というものがあるでしょうが……

「まあ行きたくないなら行かなくてもいいけどね」

「……瑠香さんに言うんだろ。ないことをメインで」

「じゃ名答」

ニヤリと笑みを浮かべてきたナユだった。

この子は将来悪女になるだろうな。

「……わかったよ」

「初めからそう言えばいいのよ。お金はあとで渡すから立て替えておいてね」

「はいはい」

とりあえず瑠香さんに外出許可をもらって行くしか……

第六羽 却下

「はぁ？ 出すわけねえだろ」

そんな簡単に出してくれるはずもなかった。

僕がくださいと言ったらダメと言われてデコピンされた。
なんと理不尽なことだろう。

「んなこといってもナユの奴に言われたんですって」

「ダメなものはダメだよ。昨日走って入院を延長してる輩をそう簡単に出すもんかい」

「僕の沽券に関わるんですって」

「こっちはアンタの命に関わるんだよっ」

今度はチョップを正面から喰らった。この人、不良は卒業したんじゃないかったのか。

「むう………こんなをお願いしてもダメっすか」

「ダメなもんはダメだよ」

仕方ない………こうなったら最後の手段を使うしかないかな。

第七羽 脱出

僕は瑠香るかさんが他の病室に点滴をしに行く時間を見計らい、病院を抜け出した。

この病院の見張りは瑠香さんが唯一厳しいだけで他の人は緩いから簡単に出来るのだ。

なるべく明日の検査でばれないように走らずに急いで病院近くの本屋に向かった。

『ブックストア・スノハラ』と書かれた看板が表に飾られている本屋にたどり着き、中に入ると見知った顔が目に入った。

「あれ？ 紅こうじゃん。退院したの？」

前掛けをつけて本棚に本を整理していたサワヤカ君は僕の幼馴染の一人で『ブックストア・スノハラ』の一人息子である驚原すのはら翼はなである。

翼は作業していた手を止めて僕に近づいてきた。

「パジャマ姿だからそれはないか。抜け出してきたの？」

「うん。とある女の子のわがままを聞くためにね」

「？」

僕の言っていることの意味がわからなかったのか、翼はサワヤカフェイスを少し傾げた。

「まあ看護師さんたちを困らせないようにね。それよりここに来た

「つてことは本がご所望かな？」

「そうそう。この紙に書いてある本を買いたいんだけど……」

「僕がナユから受け取った紙を翼に見せると翼はそれを右手に取った。」

「ふむふむ……このジャンルは確か……」

翼が僕をその場に取り残して奥の方に消えていった。

僕は翼が戻ってくるまで近くの本棚の本に手を出した。

『ドキッ！？ 女の子の気持ち』

『苦難を乗り越え性転換』

『男を捨てた男たち』

……うむ。

このコーナーの本は僕には合わなそうだ。

本を探す手をとめるとちょうど翼が戻ってきた。

「三つは見つかったけどあと一つはここにはないみたい」

「ならとりあえず三つでいいよ。もし入ったらおしえてくれればいいし」

「悪いね。でもすぐに入荷できるだろうからお見舞いついでに届けてあげるよ。紅が抜け出したら看護師さんたちに迷惑がかかるだろうしね」

うん。なんて良い親友なんだろうか。

こんなの良い性格で、こんなに良い美貌の持ち主だなんて神さまも不公平なことをするものだ。

翼が唯一ダメなのは運動くらいだ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうかな」

「いいよいいよ。じゃあ三冊で千四百八十五円になります」

僕はポケットの財布から二千円を取り出しておつりの五百十五円を受け取った。

「じゃあ看護師さんに見つかるやばいから帰るよ」

「退院してからも『ブックストア・スノハラ』をよろしく」

翼はサワヤカに手を振って僕を送り出してくれた。

第八羽 天罰

本屋から病院に戻り、後は病院内に入って病室に戻るだけになった。

「瑠香^{るか}さんは点滴が下手だからまだ終わってないはずだ」

他の看護師たちに見つからないように注意をしながら病院に入っ

人も少なかったので無事に入れたと思った次の瞬間、背後から殺気を感じた。

「んっふっふ〜どこに行つてたのかな〜ね・こ・ま・くん？」

僕は後ろを振り向けずに、身体から嫌な汗が吹き出るのを感じた。ゆっくりと首を後ろに回すとそこには笑顔で僕を見つめている瑠香さんがいた。

しかし目が笑っていない。

「さっきアタシは警告したよね〜？」

「まだ点滴中のはずじゃ……………」

「それが珍しくうまくいってねえ」

「は、ハハ……………」

「ふふふっ」

「あはは……っ」

「堂々と抜け出してんじゃねえっ！」

スパコーンといい音と、瑠香さんの怒声が病院のロビーに響き渡った。

瑠香さんのスリッパは見事に僕の額を捕らえて僕の額には綺麗に赤い跡が残った。

「あう……」

「ちゃんと反省しなっ」

「あ……い……」

何とか強烈な一発だけで解放してもらえた。

しかし次回からは本当に命がないかもなあ。

もしかしたら手足を縛られて退院日まで動けなくされるかもしれない。

一応ナユにこういうのは控えるように頼んでみるか。

とりあえず買ってきた本の入った袋を握ってナユの病室に向かった。

第九羽 理不尽

「遅い」

僕がナユの部屋に入ってからの第一声である。
右手を吊ったまま左手で頼杖について膨れ面になっていた。

「抜け出すタイミングとかが大変だったんだよ」

「そんなの関係ないわ。次はもっと早く買ってきて」

無理矢理抜け出し、それがばれて痛い一撃を食らったのにこの仕打ちはひどくないかと思っただが、それより先に買ってきた本をナユに渡した。

「はい。頼まれたもの」

「……足りないじゃない」

「本屋になくてさ。でも近いうちに僕の友達が持ってきてくれるって」

「自分が一番読みたかった本を買ってこないなんて、なんて使えないのかしら。初めてのお使いに行くちびっ子達より使えないんじゃない？」

「んな……」

「まあ仕方ないわ。我慢してあげる」

何で彼女に妥協してもらわないといけないんだろうか。

一言何かを言ってやるうかと考えたがその一言が思い浮かばずに謝ることしか出来なかった。

「じゃあ読み聞かせて」

「はいはい」

半ば予想していたことを命令されたので曖昧に返事をして三冊のうちの一冊を手にとって広げた。

中学のころに読み聞かせの手伝いをさせられてたので、ある程度は嘸まずに読むことが出来た。

本の内容は不思議の国に迷い込んだ女の子が苦難を乗り越えていくという童話だった。

第十羽 褒美

半分ほど読み終えたところで彼女の様子を覗いてみると眠そうに目を細めて首をコクリコクリと一定のリズムを打っていた。

「眠いの？」

「んん……」

「寝たら？」

「んん……」

僕の提案に彼女は可愛らしく首を横に振った。

眠いなら無理をしなくてもいいのに。

僕は仕方なく読んでいた本を閉じて、彼女に布団をかけてあげた。

「ふにゃ……」

ナユは黙っていればモテそうなのにもったいない性格だなと改めて感じた。

しかしどうして僕の周りには美男女が多いのだろうか。

翼^{つば}しかり、瑠香^{るか}さんしかり、ナユしかり、もう一人の幼馴染の刹^せ那^{つな}しかり……

僕だけがごくごく普通な高校生。なんだか泣けてくる。

過去に幼馴染たちに三人の中で僕だけが普通だと言ったら「ネコっちはカワイイからいいの」と刹那に言われた。

一発攻撃しようとしたが身長の違いでことごとく防がれた。

ちなみにネコっちというのは僕のことである。

「すう……」

ナユの寝息も聞こえてきたから帰ろうかと立ち上がると、服の袖を握っているナユの手に気がついた。

起こさないように離そうとしたがしつかりと握っていて、離そうとすると起きてしまいそうだったので仕方なくそのままにして椅子に腰を下ろした。

「はあ……暇だな」

空いている手で先ほど読んでいた本を取って読むことにした。

主人公の女の子がお城に迷い込んで女王様に追い掛け回されるという話。

昔からよく聞く話の現代風アレンジがされているものだった。

「んん……」

ナユが少し動いたのでその動きにあわせて掴まれている方の手を動かした。

「……パパ……」

「……寝言か」

確かお父さんは小さい頃に離婚しているって言ってたけどやっぱり親のことは忘れられないんだな。

僕は早く乳離れしたいと思っているがそれは親がずっと近くにいるからそう思うんだろう。

そんなことを考えているとドアが開けられた。

「お、まだいたのかい」

「ナユの奴が離してくれないんです」

「まあまあ可愛らしい寝顔しちゃって。アタシにはこの寝顔を見せてくれたことはないのにねえ」

「そうなんですか？」

「そうさね。那由多なゆたと初めて知り合ったのはアタシが高校生の頃だったけど一回も見たことないさ」

「高校生の頃ってそんな昔から？」

「ま、詳しい話は気が向いたときにしてやんよ」

話を流されたから深入りはしないほうがいいんだろうな。

「じゃあ邪魔者は退場しますかね」

「いや、瑠香さんがいないと解放された後にどうすればいいかわからないですからいてくださいよ」

「どうしようかねえ」

「綺麗な瑠香さん、お願いしますっ」

「恥ずかしいこと言うんじゃないよっ。ま、まあいてあげるよ」

瑠香さんは軽く頬を赤くしながら僕の頭を叩いてきた。照れ隠しなのかわからないけど、ぼーりよくはんたーい、と言いたい。

僕の心のメモ帳に一つ項目を作ろう。

『素直な感想を言うと攻撃される場合があるので注意』と。

「そういえば瑠香さんってどうしてナースになろうとしたんですか？」

「そうさねえ。さつきも言ったけど高校のときに他校の奴らにボコられて入院したときかねえ」

なんだかこの人と僕の住む世界は別世界のようだ。他校の人に襲われるなんて想像も出来ない。

「ま、それで色々あって今に至るわけ」

「その色々を聞きたいんですけど……」

「却下。ハズい」

これ以上深入りすると再び叩かれそうな気がしたので深入りしないことにした。

それにしてもこの人が改心するほどの出来事とは何だろう……

「じゃあ話を変えて、瑠香さんって綺麗だけど彼氏とかいるんですか？」

「ん〜」

あ、はぐらかされた。
顔は赤くしてるからいるんだろっけど。
少しからかってみるかな。

「どんな人なんですか？」

「アタシにそんなのいるわけないじゃないか」

「またまた」

「いないって」

「本当ですか？」

僕がニヤニヤ笑っていると容赦なしにデコピンが飛んできた。

「はわっ」

「しっしっしっ」

「むう。いいじゃないですか」

「んん……んん？」

瑠香さんと僕がじゃれてっていると、僕の右袖を握っていた手を離して自分の目を擦りながら上半身を起こしたナユがこちらを見てきた。

「……まだいたの？」

「いや、ナユが離さなくて」

「あ、ご、ごめん」

素直だな。

いつも素直なら可愛らしくていいのにな。

「んじゃもう外出時間も過ぎるから帰りな。今度脱走したら……ね？」

「は、はいっ」

命がないだろうな……僕は瑠香さんに目で殺されそうだ。

この人の目力に勝てる人はいるのだろうか。

少なくとも僕の知っている中ではいないとの結論に至った。

「……明日も来る？」

部屋を出る間にナユがそんなことを聞いてきた。

「ん？ そのつもりだけどダメかな？」

「べ、別にアナタが来たいならかまわないわっ」

本当に素直じゃないなあ。

まあこの子が素直だったら何人もの人が恋に落ちているだろう。

ここら辺は世の中のバランスが取れてるのかもな。

でも翼はバランスを崩しているか。

第十一羽 死刑宣告

僕は昼に來た道を戻り、自分の病室に戻った。
もちろん自分の名前を見ないように。

自分のベッドに入り込んでマンガでも読もうと母親に持ってきてもらった紙袋を探ると一枚の紙切れが入っていた。

母からのメッセージかと思いきや、字体が独特の丸みを帯びた字でなく、止め撥ね払いがしっかりとしているお手本のような字だった。

それにはこう書かれていた。

『ネコっちへ』

せつかくお見舞いに来てあげたのにいないとはどういふことさ
明日の二時にもう一回行くからちゃんといなさいよ

それと今日のことの償いをしてもらうんだから

たかみせつな
鷹見刹那』

「……」

僕のことをネコっちと呼ぶ人は今のところ一人しか思い浮かばない。
い。

いじめっ子で美人な刹那が今日来ていたってことはこの字が証明している。

「明日はナユのところに避難させてもらおう」

とりあえず刹那からのメッセージはゴミ箱にインしてマンガを読むことにした。

しかしマンガに集中できなかったので、マンガを閉じて物思いに

ふけることにした。

ナユの奴は十年も前から入退院してたんだな。

僕の人生とはまったく違う。

それよりも何で彼女はソラを飛ばすと病院の窓から飛び降りているんだろう……

自殺志願者のようには見えないけどもしかしたら心の闇があるのかもしれないから可能性はゼロではない。

流石に昨日の今日では飛んだりしないだろう。

いつかソラを飛ばのを手伝えとか言われそうだけど今は考えないようにしよう。

それにしても今日の溜香さんの一撃は強烈だった……

脳細胞がかなり死んだはずだ。

もともとそんなに詰まっていなかったからそこは気にしないが、痛かった。

次脱出するときは点滴を成功した場合も考えて抜け出そう。

今日の夜の散歩は……昼間のこともあるし、やめておこう。

見つかったら殺されるだけじゃすまないかもしれない。

明日も今日の時間に行っても問題ないかな。

今日の感じからなら大丈夫だろう。

ナユには悪いけど刹那から逃げるために使わせてもらおう。

見つかったら何されるかわからないからなあ。

そんな風に時間を潰していたらいつの間にか辺りが真っ暗になっていた。

「さて……と。寝るかな」

僕は目を閉じて夢の中に落ちることにした。

第十二羽 一時

次の日になり朝の検査では異常がなかったようだ。

笹原医師が「もうちょっとやんちゃなことは控えてね」と言い残していった。

多分昨日のことを瑠香さんが伝えたのだろう。あれは僕が行きたくて行ったわけじゃないのに。

昼食前にナユの部屋に行くと昨日と同じように食べるのを手伝われるだろうから自分の昼食を取り終えてからナユの部屋に向かった。

ドアをノックすると中から声が返ってきたのでドアを開けて入った。

彼女は僕の顔を見るなり膨れ面になった。

そんな顔もかわいいなと思う僕は病気だろうか。

入院しているから病気ではあるが。

「遅い。ご飯食べるのに苦労したじゃない」

「まあそう言わないでよ」

「まあいいわ。昨日の本を読んで」

昨日買って来た本を指差して読めと命令してきたのでそれに従うことにした。

刹那から逃がしてもらった分の働きはしておこう。

ナユには秘密だが。

昨日、ナユが寝てしまった辺りから読み直してあげた。

ナユが寝た後に読んだので昨日よりスムーズに読むことが出来たと自分では思う。

物語の最後は主人公の女の子がソラを飛んでいき、自分の両親の元に帰るといふハッピーエンドで終わった。

ナユがソラを飛びたがるのはこの話が原因だろうか。
やはり親のことが好きなんだろうな。

時計を確認するとまだ二時だったので次の一冊に入ろうと手を伸ばした。

するとナユがその手を止めた。

「本はいいわ」

「ん？」

「自分とお話しましょう？」

「まあいいけど」

さて、何を話そうか。

昨日は自分のことを話したからナユのことでも聞いてみようかな。

「ナユって目の色が違うけど両親は日本人なの？」

「一応ね。ただお父さんの方のお婆ちゃんが外国人でその影響みたい」

「へえ。それにしても綺麗な色だよねえ」

「は、恥ずかしいからジロジロ見ないでよ」

「じめんじめん」

そんな感じで話をしているとドアがノックされた。

瑠香さんが来たのかと思い、僕がドアを開けるとそこには別の顔があった。

第十二羽 一時（後書き）

最近忙しいので更新が遅くなると思いますが長い目で見てくださるとありがたいです……

第十三羽 反射

「あ……」

「よ〜」

僕は思わず開けたドアを勢いよく閉めた。
鍵でも掛けようと思ったが鍵なんぞあるわけがなく、抵抗むなしく力負けした。

「なによ〜いきなり閉めなくってもいいじゃん」

「く、来るなっ」

「別に何にもしないわよ〜」

「……どちら様？」

僕のほうを見ながらナユが尋ねてきた。
僕が答えようとすると後ろから頬をつねられてしゃべれなくされた。

「ひはいひはい」

「な〜に？ ネコっちは入院中にも女の子を口説いてるの〜？ それにしてもカワイイ顔ね」

顔を少し赤らめて俯くナユ。
本人もまんざらでもないのか。

「私は鷹見刹那。たかみせつな ネコっちは物心がついた頃からの仲よ」

「自分は空閑那由多です」くがなゆた

「はあへっへ」

何で人の頬をつねったまま自己紹介をしてるんだ。
無理矢理離して刹那から距離を取った。

「何でオマエがここに来てんだ」

「親切な看護師さんに聞いたのよ」ネコっちの友達だって言ったら
快くおしえてくれたわ」

「……ちなみにその看護師さんの名前は」

「確か猿渡さんって呼ばれてたかな」さるわたつ

あんの人め。

口では言えないから心の中で怨んでやる。

そんな僕のことを気にせず刹那がベッドの脇の椅子に腰を下ろ
した。

「ま、昨日のことは退院後に奢りで許してあげる」

「……そりゃどーも」

刹那に奢らされると財布が寂しくなる。

この細い身体はどこにあんな量のケーキが入るって言うんだ。

加えて食っても太らない体質。

世界中のダイエットを頑張っている女性にいじめられればいいのに……

「空閑ちゃんってケーキとか好き？」

「あんまり食べないからなんとも」

「そか〜お見舞いにケーキはまずいかな」

「そりゃそうだろ。てか刹那はケーキばっかだな」

「ぶう。とある女性が言うじゃない。『パンを食べるならケーキを食べなさい』って」

「それを言うなら『パンがないならケーキを食べればいい』だ」

「変わらないわよ〜」

「……フフッ」

僕と刹那のやり取りを見ていたナユが笑いをこぼした。

「仲がいいんだね」

「そうだね〜」「よくないっ」

僕の答えがどちらかは言うまでもないだろう。

「うらやましいな……自分はそういう友達がないから……」

そう思うなら素直に接して看護師たちと仲良くすればいいのにと
思うのは僕だけだろうか。

ちらりと横を見ると少し目を潤ませている刹那の横顔が目に入っ
た。

「おい……」

「なら私が友達になってあげるっ」

「……へ？」

突然の刹那の宣言にナユは目を丸くした。

「ネコっちの友達は私の友達だもん。だから今日から空閑ちゃんは
友達だよ。あと、もう一人の幼馴染の翼もいるから明日にでもつ
れてくるよっ」

「えっ……と」

ナユが困ったように僕と刹那を交互に見た。

このまま無視しても面白そうだったが流石に可愛いそうだったので
助け舟を出してあげた。

「ま、いいんじゃない？」

「う、うん」

「じゃあよろしくっ」

刹那がナユの手を両手で握った。
うむ。友情は良きかな。

こうしてナユの友達は二人増えた。

第十四羽 トラウマ

刹那せつなとナユが友達関係になってから十分ほどで、用事があると言
って刹那は病室を出て行った。

「……いい人だね」

「そうか？」

会う度に追い掛け回され、弄くられ、奢らされている身としては
あまりいい印象がないんだが……

ナユが喜んでくれているならいいかな。

刹那が出て行ってからナユが昨日に続いて僕の過去を聴きたがっ
たので昨日話していないことを話した。

「アハハッ」

「そんなに笑わなくてもいいだろっ」

「だ、だって……アハハッ」

僕の思い出したくない過去を話した瞬間にナユの奴は笑い出した。

「いくらそんな顔だからって……アハハッ」

「僕だってそんなことになるなんて思いもしなかったよ……」

中学時代の僕の思い出したくない思い出……というかトラウマ。
あれは出会いと別れの季節の春。

部活帰りにジャージで帰宅しようとしたら新年に呼び止められ、告白された。

これだけを聞いたらうらやましく聞こえるかもしれないが告白してきた一年の性別を聞いたら十人中十人が引くだろう。

告白してきたのは男子だったのだ。

当人曰く、小学生の頃に違う学年とのふれあいで一緒の班になって一目惚れしたとの事だ。

この一年だけの出来事ならまだマシだろう。

次の年にも同じ様な事件が起きた。

それ以来僕は自分の顔と自分の名前が大嫌いなのだ。

「いつそのこと付き合っちゃえばよかったのに。理解者はいるかもよ?」

「僕にそんな趣味はない」

「私もそういう人の考えはわかんないわ」

それなら言わないで欲しい。

そんな性癖を持ちたくはない。

それからもナユの笑いは瑠香るかさんが部屋に来るまで治まらなかつた。

「おや、那由多なゆたが笑っているなんて珍しいねえ」

「あ、猿渡さるわたさん。ちょっと聞いてくださいよ」

「おいっ……」

「ん？なにになに」

僕がナユを止めようとしたがそれより早くナユが瑠香さんに耳打ちをした。

耳打ちが進むにつれて瑠香さんが笑いを堪えて肩を震わせているのがわかった。

そして耳打ちが終わった瞬間に瑠香さんが声を上げて笑った。

「アツハツハツ。コウにそんな過去があつたとはねえ」

「……」

「まあ気にするなって。過去のことは過去だよ」

慰めているのか、からかっているのかわからないけどアナタに叩かれてる肩が痛いです。

この人には知られたくなかったのになあ……

明日からからかわれるな。

「んじゃちよいとどいて。ちゃっちやと終わらせるから」

瑠香さんは僕を移動させると毎日やっているらしいことをテキパキとこなしていった。

いつもの点滴よりも手際がよかった。

「瑠香さん、点滴より手際がいいですね」

「ん〜そりゃ何年も同じ事をやってりゃね」

点滴も看護師になってからずっとやってるんじゃないのかな。

「こっちにまわされることが多いのかな。」

「よじつと。もういいよ。」

全てのことが終わるのに二十分とかからなかった。

「アタシはもう出て行ったほうがいいかね？」

「僕はどっちでも」

「自分もどっちでも」

「じゃあたまには話でもしようかね」

瑠香さんは僕が先ほどまで座っていた椅子に腰を下ろした。

「ちょ……僕の席……」

「ん」

二人は無言で同時にベッドを指差した。

「こっついつ時って息が合うんだな。」

「はあ……」

僕は渋々とベッドに腰を下ろしてナユのことや瑠香さんの話を聞いた。

第十五羽 夕暮

時間もだいぶ経ち、夕焼けが綺麗に見える時間帯になった。

「……夕焼けが綺麗だなあ」

「そうだね。那由多なゆたが夕焼けを見たいからって言ってここの部屋を取ったんだよ」

「だって入院生活はつまらないからせめて景色くらいよくないと」

ナユは夕焼けを見ると目を細めた。

瑠香るかさんもナユにつられて夕焼けのほうを見た。

「久々にこの時間までいたねえ」

「職務怠慢じゃないんですか？」

そう聞くとデコピンをされた。

「アタシの仕事は那由多の面倒を見ることだからいいんだよ。ちやんと他の仕事も終わらせているし」

そうですか。

まあ患者さんも瑠香さんに看てもらったより他の看護師さんに看てもらったほうが安心かな。

いや、懲りないエロジジイ達には瑠香さんのほうがいいかもな。

この人にセクハラしたら殺されるだろうが……

「それにアタシはこっちのほうが、気が休まるんだよ。向こうにはケツ触ってくるジジイ達がいるし、流石にそいつらには手は出せないしな」

あ、やっぱり困ってたんだ。

こんなに美人だと苦勞が絶えないんだろっなあ。

僕には一生縁がないだろう悩みだけど、ナユも大人になったらそんなことで苦勞するんだろうな。

美人と言うのは得ばかりでないんだと改めて思った。

「それよりアンタはもう時間になるから帰んな」

「ええ、もう少しこの夕……」

「少しくらい、いいんじゃないんですか？」

僕がわがままを言う前に先にナユがわがままを言った。

「そうは言ってもねえ……師長に怒られるのはアタシんだけどなあ……ま、たまにはいいか」

本当にいいのだろうか。

まあナユといられるならいいか。

「あと三十分だけだよ？」

「ありがとうございますっ」

僕は瑠香さんに頭を下げ、今日の刹那のことは忘れておこう。

それからきつかり三十分居座ってから病室に戻った。

第十六羽 綺麗 綺麗 可愛い

次の日、朝の検査が終わって病室に戻ると翼と刹那が僕の病室まで来ていた。

「お〜」

「元気〜？」

「頼まれた本を持ってきたよ」

「サンキューな」

僕たちは三人で一緒にナユの病室に向かった。

「わざわざ悪いな」

「いいよ。それに紅こうが従したがっちゃうほどの子に会えるのも面白いし」

「お、コウ。友達かい？」

特別病棟に入るところで瑠香るかさんが僕に声をかけてきた。

「あ、昨日はありがとうございました」

「いえいえ。それにしてもハンサムと美人と……ちんちくりんだねえ」

最後のは僕だろう。

この人に攻撃をすると確実に返り討ちにあうので何も言わない」とにしよう。

「ま、これくらいの比のほうが、バランスがいいかもよ」

「そーですかー」

「あんたら那由多なゆたのところに行くの？」

「はい。昨日私は友達になりましたっ」

「ハハッ。そりゃよかった。仲良くしてやってくれよ？那由多はずっと一人ぼっちだったから」

「そういい残して瑠香さんはナースステーションの中に戻っていった。」

「じゃ、行くっ」

僕たちは少し急ぎ足でナユの病室まで行った。

第十七羽 遊戯

「今日は早いわね」

「翼^{つば}たちが僕の病室に来たからね」

「はじめまして。鷺原^{すのはい}翼^{つば}です」

「よろしく。自分は空閑^{くがなゆた}那由多^{なゆた}」

初めての人だからかな。

ナユのヤツが少し大人しい気がした。

ん？僕^{ぼく}のときは初対面^{はつたいめん}からうるさかったはず。

この違いは何^{なに}なんだろう。

「はい、これ。紅^{こう}に頼^{たの}まれていた本^{ほん}だよ」

さすがブックストア・スノハラ。

毎度の事ながら仕事が早いですね。

「ありがと。コウより役に立つわね」

「それを注文してきたのは僕^{ぼく}だっ」

「知^しってる？ 戦^{いくさ}の時代は敵^{てき}の武将^{ぶしょう}の首^{くび}を持ってきた人が褒美^{ほうび}をも

らえたのよ？ いくらとどめをさしても首^{くび}を横取^{よことり}りされたらその人

の手柄^{てがま}よ」

「それとこれは違^{ちが}うだろ」

「同じよ」

「……二人とも仲がよろしいですねー」

「「どごがつ……あ」」

翼への反応がナユとびつたり被った。
本当に仲がいいのかわからないが相性はいいかもしれない。

「コウは私のわがママを聞くだけよ」

「ネコっちは猫なのに犬みたいね」

予想していたことを刹那は言ってくれた。
てか猫なのによって言うのはどういうことだ。
見た目ですか。

名前ですか。
両方ですか。

「それより何かしない？」

「遊び道具を持ってきたよー」

刹那はパンパンに膨れたカバンの中から色々なものを取り出した。
トランプ、人生ゲーム、将棋、オセロ、麻雀……どうやってそれらを入れてきた。

そのカバンは四次元カバンなのだろうか。
麻雀のやり方を中学生が知っているのか？

「この中で、四人で出来るのは……トランプと人生ゲームと麻雀だね」

「てか何で麻雀を持ってきた」

「家にあつたからに決まってるじゃない」

「那由多ちゃんは何をやりたい？」

「ん……麻雀」

「えっ」

中学生がその選択をしますか。

僕がおかしいんですか。

彼女がおかしいんですか。

誰か教えてください。

「トランプは色々やる人によつて地方ルールみたいなのがあってよくわかんないし、人生ゲームは時間がかかるわ。麻雀ならやり方を少し知ってるし」

「じゃあ麻雀をやるー」

雀卓を広げて牌を並べ始める刹那。

てか僕はあんまりルール知らないんだけどなあ。

第十八羽 賭け

「あ、それロン」

何回目のロンだろう。

僕が捨てる牌はことごとく彼らが待っているものらしい。

「ネコっち弱いわね〜いくら素人だからって弱すぎよ」

「何でそんなに強いんだよ」

「コウが弱いだけよ」

親が一周する前に僕の点数がゼロになって一局が終わった。

「んじゃ もう一回いこー」

「もう勘弁してくれ……」

「じゃあ次は負けたら罰ゲームね」

刹那せつなのヤツ、まったく人の意見を聞いてない。なら逃げるしか……

「ちなみに不戦敗はもっとひどい罰だよ」

……この人は人の心を読めるのか。

「わかったよ……やればいいんですよ……」

諦めて立ちかけた身体を戻す。
結果は目に見えているけど……

こういう予想は絶対に裏切らない。
昔からそうである。

駄目だろうと思ったたら駄目であるのが世の常だ。
昔のトラウマのときもそうだった。

「で、肝心の罰ゲームだけど……」

刹那がニヤリと笑う。
何故か寒気を感じた。

「男子が負けたら女装して病院一周。女子は恥ずかしいコスプレを
して病院一周ね」

……これは負けられない。
僕のプライドに関わる。

再び牌を並べて、麻雀を始める。

第十九羽 敗北&追加

……結果は言うまでもないだろう。

僕の惨敗だ。

刹那せつながニヤニヤと、ナユが笑いそうな顔で、翼つばさは哀れむような目で僕を見てきた。

「んっふっふっ罰ゲームはネコっちにけってーい」

「うっう……」

「ま、まあなるようにしかならないよ、紅こう」

「そんな風に言われると余計につらい……」

「ふ……フフフッ」

「笑うなーっ」

僕が叫ぶと突然ドアが開いた。

「うるさいっ」

ドアを開けたのは瑠香るかさんだった。

そして容赦なくスリッパで叩かれた。

「あう……」

「そんなに落ち込んで何かあったのかい？」

「ネコっちは賭けに負けて罰ゲームなんですよ〜」

罰ゲーム。

その単語を聞いた瑠香さんの目がキラリと光った……気がした。

「ほうほう。面白そうだねえ。アタシも混ぜてくれない？」

やっぱり光ったのは気のせいではなかったようだ。

この人の笑みが大変怖い。

「ん〜いいですけど……麻雀じゃ四人だからトランプにします？」

「だね。負けた場合は紅と一緒にその罰ゲームとやらをやるってことよ」

「じゃあネコっちが負けた場合は二倍ね〜」

勝手に決めないでくれ。

そう言いたかったが僕が口を挟む隙もなく二人が話を進めていく。

ゲームは単純にば抜きになった。

これならまだ勝つ見込みがあるかもしれないと淡い期待を持って参加しよう。

「それより罰ゲームって何するんだい？」

「男子二人は女装してこの病院一周。女子はコスプレして病院一周ですよ。ネコっちの場合は一周して着替えてもう一周で」

「ハハツ。そりゃコウが落ち込むわけだねえ……お、揃った」

瑠香さんが僕の手札からカードを引いてペアを捨てる。気がつくとも瑠香さんの手札はだいぶ減っていた。

この人が罰ゲームを受ける事はないだろうな。

ちなみに今の手札の枚数は僕が五枚、瑠香さんが二枚、他三人が四枚、ジョーカーは僕の手元に。

……僕ってこういうゲームは全般的に弱いんだな。

心理戦とか苦手だし。

「このままだとネコつちがまた罰ゲームかな」

「流石に女装で二周はキツイねえ」

瑠香さんと刹那が二人揃ってニヤニヤと僕を見つめてきた。

この二人、なんだか息が合っている気が……誰か助けてください

……

気付くと瑠香さんと刹那が残り一枚になっていた。

「んっふっふ〜私はあがり〜」

「アタシもあがりだよ」

残ったのは僕と翼とナユの三人になった。

しかし一回も瑠香さんの手元に僕のジョーカーがいなかったのは奇跡だろうか。

「誰かな誰かな〜女装するのは誰かな〜」

あがった刹那が僕のほうを見ながらそんなことを言ってくる。

「あ……ごめん、紅」

僕のカードを引いた翼が揃ったようであがってしまった。

これで僕とナユの一騎打ち。

手札は僕が三枚、ナユが二枚。

とりあえず僕がナユのカードを引くと揃った。

てかこの状況じゃ絶対揃うか。

「ん……」

僕の残った二枚を睨みながら考え込むナユ。

頼む……ジョーカーを引いてくれ。

「……はあ……仕方ないわね」

ボソリとナユがそう言った気がした。

そしてナユが手を伸ばし、ジョーカーを引いていった。

「やたっ」

「おお。ようやくネコっち、ジョーカーから脱せたねえ」

今度は僕が引く番だ。

ここを外したら終わりなんだろうな。

慎重に選ばないと……

じっと見つめているとナユの目が右のカードを見た。

そっちなのかな。

もうわからないからナユを信じるしかない。
僕は意を決して右のカードを引いた。

「揃ったーっ」

「はいはい。よかったわね」

ナユを信じてよかった。
ありがとうナユ。

「ん〜空閑ちゃんか〜」

「まあ、いいじゃないですか」

「じゃあ次の日曜日に私が持ってくるから楽しみにしててよ〜」
何で刹那はそんなものを持っているんだろう。

「ネコっちにはあれで……空閑ちゃんは……にゅふふ……」

……幼馴染の笑みがとてつもなく怖いのですが……気のせいだろうか。

「んじゃそろそろ那由多なゆたの検査の時間になるからアンタたちは帰
な」

「は〜い。また遊ぼうね〜」

「うん。また今度」

僕たちはナユの部屋をあとにしていったん僕の病室に行くことにした。

第二十羽 母親

「ちょっと刹那せつな、聞いていい？」

「何かな？ ネコっち」

病室についてから僕は刹那に尋ねてみた。

「来週コスプレを持ってくるって言ってたけど……その入手元は？」

「ん？ もちろん自作に決まってるじゃないっ。コスプレは自分で作ってなんぼよっ」

……今まで着せられた服とか自分で作ったものだったのか。てっきりそういう店があって買ってきているのかと思ってたのに。

「ネコっちにはとっておきのものを作ってきてあげるよ」

「いや……」

「せつちゃんは紅に着せるのが楽しみって言ってたよね」

「もちっ。ネコっちに着せるのが私の生きがいさ」

「……やめてください」

僕のトラウマが呼び起こされるから。

しかし僕のそんな要求通じるわけがない。

通じていたらとっくの昔にやめてくれているはずだ。

僕らがこんな雑談をしているとドアが開かれた。

「コウちゃん」

そうほわほわした感じで言いながら入ってきたのは僕の母親、猫^ね羽藍^{こまいたん}だった。

てか他の入院患者もいるのでそんな大きな声で息子の名前を呼ばないでほしい。

「母さん、そんなに大きな声を出すと他の患者さんに迷惑だよ」

「母さんじゃなくて藍ちゃんって呼んでよ」

自分の息子に名前で呼ぶことを強要しないでください。
しかもちゃん付けを。

「あら〜？ 刹那^{せつな}ちゃんに翼^{つばさ}ちゃんじゃない」

「ども〜藍ちゃん」

「こんにちは、相変わらずですね、藍さん」

「いつもコウちゃんと仲良くしてくれてありがとね〜」

この人はいつもこんな感じだ。

大人びて見える刹那と並ぶとどちらが年上かわからないほど童顔だが、来年で四十になる。

こないだは大学生らしき男子にナンパされたと自慢してきた。その大学生はロリコンだろうか。

「コウちゃんの言った物、持って来たよ〜」

母さんはそう言って手に持ってた紙袋を僕に手渡してきた。
頼んでおいた暇つぶしの本だ。

「ありがとう」

「んん〜コウちゃんかわいっ」

小さい母さんが突然わけのわからないことを言いながら飛びついてきた。

「……公共の場で抱きつかないでよ」

「仲いいですよね〜猫羽親子は」

「でしょでしょ〜?」

そう言いながら頬擦りするのはやめていただきたいのですが……

「私はコウちゃんと結婚するのよ〜」

あなたはもう結婚してるでしょうが。
僕の父親、ねこまつ猫羽蒼と。

「小さい頃にコウちゃんが言ったのよ〜」ママと結婚するんだ〜
って」

「いつの話だっ」

勘違いされかねない発現は控えてほしい……
というか何で十数年前のことを今持ち出す。
もちろん言っていたのは幼稚園の頃だ。

「ぶう。コウちゃんのいけず〜」

そう言っつてようやく離してくれた。

「あ、もうこんな時間か。店番を手伝わないといけないから僕はこれです」

「じゃあ私も帰るかな」

「じゃあね、紅こう」

「来週を楽しみにね、ネコっち」

楽しみというか不安がいつぱいだ。
いつもみたいに逃げたいが、病院だから逃げるに逃げられない。

「また来てね〜」

母さんは僕のそんな気持ちも知らずにのんきに手を振って幼馴染達を送り出す。

「じゃあ私も帰るわね〜蒼さんが待ってるから〜」

「はいはい。また何かあったら頼むよ」

「任せなさい。じゃあね〜」

みんなが帰ったので、暇つぶしに持ってきてもらった本を読むことにした。

やっぱり読書が時間を潰すのにはいいよな。

「はあ……はあ……美少年の女装……」

……何か寒気を感じた。

確か向こう側の患者はオタクだって瑠香るかさんが言ってた気が……
本当に来週が心配になってきたぞ。

僕は本を読むのに集中できなくなった。

だから寒気から逃れるためにかなり早いけど眠りにつくことにした。

お昼になったら瑠香さんが叩き起こしてくるだろう。

第二十一羽 不安

「…………ウ。…………コウってば」

「んん…………」

誰かに身体を揺すられた。
溜香^{るか}さんかな。

「んん…………溜香さん…………？」

「何言ってるのよ。自分よ」

目を擦りながら顔を起こして、声のしたほうを見るとナユがいた。

「あれ…………？ 何でナユが？」

「検査が終わってもうすぐお昼ご飯だから」

「…………食べさせろと」

「正解」

そのためだけにわざわざ普通病棟まで来たのか。
腕の骨にひびが入っているのにご苦労なことだ。

「猿渡さんには言っているからコウのお昼も自分の部屋にあるわ」

「僕に拒否権はないんだね」

初めからわかっているがそう言っておきたい。
返ってくる答えはわかりきっているが。

「もちろん。だって自分のわがママを聞いてくれるんでしょう？」

「……わかったよ」

僕は抵抗を諦めてベッドから出た。

「じゃあ行くっか」

「ん」

ナユが手をさし伸ばしてきたので僕はその手を掴んであげた。
この娘はこういうところに恥ずかしさとかを感じないんだな。

「今日の午後も暇？」

「入院中はずっと暇だよ」

ナユと会っていないときは勉強か読書かだし。

僕のその答えを聞くと一瞬笑顔を見せてくれたがすぐにその笑顔は引っ込んだ。

「そ、そう。なら暇つぶしに自分のところのいいてもいいわよ」

「はいはい」

本当に素直じゃないんだから。

来てほしいって言えはいつでも行くのに。
まあ退屈しないからいいか。

ナユの病室についてから僕は前回のようにナユにご飯を食べさせてあげてから自分の昼食を取り、翼が持ってきてくれた本を朗読してあげた。

途中で瑠香さんも来て来週の罰ゲームのこととトラウマのことをからかわれた。

本当に来週のこと不安で仕方がない。

「どんな衣装になるだろうねえ」

「……考えたくないです」

今までの経験上持ってこられる物の予想はできるから。
公共の場ってことを考えて控えめにしてくれればいいけど、アイツがそんなこと気にしてくれるわけない。

絶対に目立つものを用意してくる。

メイド服やらセーラー服やらミニスカやら……

「ま、ちんちくりんのコウには似合うんじゃないか？」

「男としては似合いたくないです」

トラウマもあることだし、勘弁してほしい。

「自分もコウの女装見てみたい」

「そついうナユだって何を着せられるかわかったもんじゃないぞ」

「自分はそついつのあんまり着ないからある意味楽しみかも」

「……その言葉、後悔するぞ」

「アタシは見ているだけだから楽しみだねえ。お、そろそろ時間だ。アンタはもう帰んな」

「あゝい」

僕が帰ろうとベッドから立ち上がるとナユが僕の袖を掴んできた。

「明日も来るの?」

「来ちゃダメかな? 明日も明後日もその次も」

「コウが来たいなら、べ、別に来てもかまわないわっ」

やっぱりナユはツンデレだなあ。

もう少し素直になつてもらいたいものだが無理だろうな。

僕はナユと瑠香さんをあとにして自分の病室に戻った。

第二十二羽 罰ゲーム直前

来てほしくない日は来るのが早いようで、一週間が過ぎ、日曜日の朝を迎えた。

憂鬱なまま朝の検査を終えて病室に戻った。

「はぁぁ……」

とりあえず、ナユの検査が終わるまでは暇だから本でも読んで時間を潰すかな。

昨日母さんに持ってきてもらった本の中から適当に一冊取り出し、初めから読む。

半分くらい読み終わったところで刹那と翼が僕のところに来てきた。

「ちゃあ〜」

「やけにテンション高いな」

「そりゃねえ？」

「ん、あぁ……」

ちょっと待て。翼のその反応は何なんですか。

目がすごい泳いでいるんですが……

なんかすごい不安だ。

今まで以上の服か？

「まあ、覚悟してよ〜?」

覚悟は一週間前からしていますとも。
未だに固まっていますせんが。

「空閑^{くが}ちゃんの検査はいつ終わるのかな?」

「終わったら瑠^る香さんがおしえてくれるって言ってたよ」

「じゃあそれまでここで待っていてよ〜」

「翼たち、昼は?」

「まだ食べてないから今のうちにどっかで食べてこようかな」

「久々ね〜昔は三人でよく行ったのにな」

「僕は病院食だから行けないけど」

「今度三人で行こうよ」

「僕が退院したらね」

「じゃあ僕たちは行ってくるよ」

「いつてらっしやい」

僕は二人を送り出してから本に集中した。

女装の事は今更気にしても仕方ない。

今日着ないといけないことには変わりはない。

嫌だけど……

「よぉく検査、終わったぞ。それにお姫様からご指名だ、ナイトク
ン」

「……ナイトって誰ですか。どうせナユからの指名って言ったって
昼飯食わせるってことでしょ」

「ご名答。アンタのも向こうに運んでおくから」

「あゝい」

僕は本を置いてベッドから起き上がり、ナユの部屋に向かうこと
にした。

部屋につくとすぐに瑠香さんがお昼ご飯を持ってきた。

僕は毎度のようにベッドに腰を下ろし、ナユに食べさせた。

いつものようにナユは口を開けてスプーンに喰いつく。

「いつも思うけど、恥ずかしくない？」

「んむ〜？ んふふむふ〜」

「飲み込んでから喋りなさい」

「んむ」

ナユは口をもごもごと動かして飲み込んでからニヤリと笑ってき
た。

「恥ずかしいわけないじゃない。ここには自分とコウしかいないし」

「……さよけ」

じゃあ他の人がいたら自重してくれるのか？

そう思いながらスプーンを差し出すと、ナユは再び喰いつく。

「んむんむ」

幸せそうに食事をしているナユの顔を見るとこっちまで幸せになつてくるなあ。

また口を開けてきたので再びスプーンを差し出す。

そしてナユは喰いつく。

「んむん……むぐっ!？」

「やほ……って大丈夫!？」

「んぐぐぐ……」

ナユは突然入ってきた刹那たちに驚き、食べていたものを喉に詰まらせたようだ。

刹那は慌ててナユに水を飲ませた。

「ぷはあ……し、死ぬかと……思った……」

「驚いたよぉ〜急に空閑ちゃんが喉を詰まらせるんだから」

ナユの背中を刹那がさすってあげている。

ナユは少し咳き込みながらもなんとか喉に詰まったものを飲み込

めたようだった。

それからナユの食事はすぐに終わり、僕も刹那とナユに見られながら食べにくい食事を済ませた。

翼はお茶を入れてくれていて僕の方を見ていなかっただけ幸いだ。

「よっし。二人とも食べ終わったから早速罰ゲームといきますか」

そう言っただけ刹那は背負っていた少し大きめのリュックサックを椅子の上に置き、中から複数の紙袋を取り出した。

だからお前のリュックサックは四次元ポケットなのかっ。

何でそんなに出てくるっ。

「空閑ちゃんのはこれね」

そう言っただけ四つの内の一つをナユに渡す。

……なんで三つも残っているんですか。

「んでえ、ネコっちには選択の余地を与えてしんぜよう」

「……選択の余地はあってもなくても同じ気が……」

「気にしないでいい気にしないでいい」

「……お気の毒に」

何か翼の独り言が聞こえた気がしたんですが……

「ネコっちはこの三つを渡しておくから。この紙袋のは絶対に身に

つけて、あとの二つの内の一つはネコっちの好きなほうで。さ、男子達は外に出た出た。空閑ちゃんが着替えるんだから」

僕と翼は刹那に背中を押されて廊下に出された。

「僕はどこで着替えると……」

「……とりあえず近くのトイレじゃない？」

「……なあ、翼はこの中身を知ってる？」

「……一応せつちゃんに見せてもらったけど……自分の目で確認するほうが早いよ……」

「……どっちか一方がマシなことを祈るよ……」

「いや、僕としては絶対って言うてたほうが……」

……なんだか不安が大きくなってきた。

悩んでも仕方がない。

僕は三つの紙袋を抱えて近くの男子トイレの中に入った。

第二十三羽 叫び

一つ叫ばしてもらっていいですか。
ってどうか叫ばずにはいられない。

「何じゃこりゃ〜〜〜っ！」

トイレに人がいたら驚き飛び跳ねるだろう。

だがこのトイレには誰もいない。

それだけは幸いだった。

何かの間違いかと再確認するために三つの紙袋を順番に覗いた。

まず一つ目は僕が選べるヤツの一方。

その中には何かのアニメにでも出てきそうなセーラー服で取り出してみるととてつもなく短いスカート。

これは毎度のことだから驚かない。

そして二つ目は選べるヤツのもう一方。

フリフリのレースやらなんやらがついている、いわゆるメイド服と言つものだった。

ロングスカートで先ほどの短いスカートよりはいくぶんかマシだと思えた。

これも毎度のことだからそれほど驚かない。

僕が叫びたくなつたのは絶対身に着けると言われた三つ目の少し小さな紙袋だ。

その中には僕の髪と色と似た色の猫耳、そしてなぜかブラジャーが入っていた。

僕は思わずこれらを袋の中突っ込んでトイレを出た。

そして向かう先は翼ウイングのところ。

「ちよっ……これっ」

「んまあそついうことだよ……」

「ちよつと刹那せつなに言って……」

「多分まだナユちゃんが着替えてると思うよ。ナユちゃんの方も着るのが大変そうなヤツだったし」

……とりあえずブラジャー以外のものをつけるか……あとが怖いし。

再びトイレに戻ってメイド服と猫耳を取り出した。

「はぁ……どういっつもりだよ……これ」

というかこういうのを一人で着れるようになっていて自分が嫌だ。どれだけ刹那のヤツに着せられているんだ、自分。

「これでいいのか……ってか何でこんなに僕のサイズにピッタリなんだ……」

刹那にサイズとかを測られた事は一度もない。

アイツにはそういう能力があるのだろうか。

見ただけで相手のサイズがわかる程度の能力が。

ブラジャー以外を身に着けたところで翼のところに戻る。

「つばさあ……」

「ん、ああ……中も終わったみたいだよ。さつきせつちゃんが入っていいって」

「じゃあ入るか……」

とりあえずこの袋の中のブツについて問い詰めておきたい。

一応僕がノックをすると中から返事があったのでドアに手をかけて開けた。

「刹那っ！ これはどういう……」

そこまで言っただけ僕は言葉が詰まってしまった。

部屋にいたのはいつもの私服姿の幼馴染と、いわゆるゴスロリと言われる服で身を包んで耳の長い兎の人形を抱えているナユだった。しかもナユの頭には犬とも猫とも違う獣耳がついていた。

「じ……ン」

そう言っただけナユは招き猫のように手を丸めた。顔を赤らめてやっているところから推測するに刹那の入れ知恵だろう。

しかし思わず意識が飛びそうになった。

「んん〜やっぱり空閑^{くが}ちゃんはゴスロリだよねっ。……それよりネコっち、ブラは？」

「……ハッ。そうだよ。これはなんなんだっ」

戻ってきた意識で僕はそう叫んで、紙袋を突き出した。

しかし刹那は悪びれる様子もなく、当たり前のように言い返して

きた。

「ん〜？ Bカップだよ？」

「そういうことじゃないっ。何でこれをつけないといけないんだっ」

「……コウ、可愛い」

「大体男の僕が……へ？」

ナユからの予想もしなかった言葉に思わず目を丸くしてしまった。
いや、可愛いと言われても嬉しくないんですが。

「ね？ 空閑ちゃんもそう言っているわけだし付けてみようよお」

「いやっ……これとそれとは話がちが……」

「ええ〜いつ。観念せ〜いつ」

「うわっ」

そう言っつて刹那は僕に飛びついてきた。

後ろに倒され、マウントポジションを刹那に取られた。

解放されようともがいたが、自分より大きい刹那から逃げる事は
できなかった。

「ちよっ…離せえーっ」

僕が叫ぶとさっき閉めたドアが勢いよく開かれた。

救世主が来たかと思っただが、そこにいたのは瑠香るかさんだった。

「うるさいっ」

「ぶっ……きゅっ……」

押さえつけられている僕にお構いなしのスリッパ攻撃が顔面に飛んできた。

僕の力が抜けた次の瞬間に、慣れた手つきで服の上半身を脱がされ、ブラジャーをつけられた。

そして脱がした服を素早く着せて何事もなかったかのように離れていった。

「ナイスですっ。看護師さんっ」

「ん？ なんだかわかんないけど……」

刹那が拳を突き出してきたので瑠香さんはそれに自分の拳を合わせた。

……てか変な感じがするんですが……
女子っていつもこんなものをつけているんですか……

「さあさあっ。並んだ並んだっ」

「うっ……」

叩かれたところをさすりながら立ち上がってナユと並ぶ。

「ふむっ。余は満足じゃ〜」

「……早く終わらせたい……」

「自分はこれ、好きかも」

「ホントに女の子みたいだなあ」
「ウ」

「……どんまい、紅」

諦めて行くしかないか……
何も起きなければいいけど……

第二十四羽 想定範囲……？

「……瑠香さん、一つ聞いていいですか？」

「ん、うん？ なんだい？ 猫羽少年」

「これは瑠香さんの仕業ですか？」

「いや、アタシのせいって言えばアタシのせい……なのかな？」

歯切れの悪いことを言ってくれる。

「アタシは師長に言っただけなんだが……」

どうして瑠香さんの語尾の歯切れが悪いかと言えばこの状況のせいだ。

なぜかロビーに検査の時間じゃない入院患者たちとオタク臭のする人たち、そして女子高生らしき人たちが多数いるためだ。

「ちよいと師長に聞いてきてみるよ」

そう言い残して瑠香さんは僕らを廊下の影に残してナースステーションに入っていった。

そして数分としない内に僕たちのところに瑠香さんが戻ってきた。

「悪いっ。どうやら師長が原因らしい」

瑠香さんの話をまとめるところだ。

僕の女装&ナユのコスプレのことを瑠香さんが師長さんに話した。そしておしゃべり好きの師長さんは患者の面倒をみているときに、ついそのことを話してしまった。

その話した患者と言つのが僕と同じ病室のオタクの人だったらしい。

そしてそのオタクが友達を呼び、師長は患者達に言いふらし、今に至ると言うらしい。

「根本的な原因は瑠香さんが師長に言ったところじゃないですかっ

これじゃあ罰ゲームじゃなくて公開処刑だ……

本当に死にたくなる。

「ま、まあちゃっちゃと回ってくれば終わるんだし」

「生きてここに帰って来られるかわかりませんがねー……」

肉体的にも精神的にもね。

帰って来られればいいけど。

「んまあ、ネコっち、行ってこーいっ」

「のわっ」

そうやって刹那^{せつな}は僕の背中を無理やり押してきた。

突然のことだったので僕はつんのめってロビーに倒れこんで顔を打った。

ベチっとな音がしたためにロビーにいた人たちの視線がこつちを向いた。

ついでに倒れた僕の横にはナユが人形を抱えたまま立っている。

「大丈夫？」

「な、なんとか……」

「キヤーツ。何この子たち〜可愛いーっ」

立ち上がるうとしたら突然人の波に吞まれた。

僕たちのところに近づいてきたのはどうやら女子高生らしき人たちのようだった。

何とか僕とナユは手をつないではぐれずに済んだ。

「ねーねー、どっちが男の子なの〜？」

「じっちゃん」

ちょっと待て、そういつことを言いつと……

「マジでー？ホントに男の子〜？」

「ほっぺ柔らか〜い」

「肌もきれい〜」

「この胸はどうしてるの〜？」

「ちょ……ひょわっ」

助けて……

同世代の女子に片尻つかまれた……

てか何でみんな僕の方にくるんだあつ。

「じゃあコウ、頑張つて」

ナユのヤツは僕を人の波の中に残して一人で回ろつとロビーの中に向かつて歩き始めた。

僕を置いていくのかつ。

「ちよつと彼女と写真撮つてもいいでござるか？」

「ん？ ダメ」

何かナユはナユでオタクたちに囲まれたようだ。いつものようにクールな感じで接しているようだった。

「そんなこと言わずに一枚だけ」

「……一枚千円」

ちよつとお前つ。

お金を取んのか。

流石に一枚に千円も払うんじゃない引き下が……

「千円なら払うぞつ」

「拙者もつ」

「オレもつ」

……オタクの懐の暖かさに驚いた。

ちらりと見てみるとナユの腕の中にはいっぱい千円札があった。流石にお金をもらったなら仕事は果たさないといけないだろう。見事な営業スマイルでどんと写真を撮られていく。

「なあ〜に？ キミ、あの娘のことばっか見てないで私たちのほうを見てよ〜」

「むぎゅ……………」

見るも何も身動きが……
なんか柔らかい触感が……
柑橘系の匂いが……
慣れていない匂いやら触感に意識が飛びそうになる。

「キミ、いくつ〜?」

「もしかして中学生〜?」

「二、高二……………」

「ええ〜マジでえ〜」

「アタシと同級生なんだあ〜」

この状況じゃ反撃しようとするにも動けない。
もう諦めてされるがまま、身を任せたほうがいいのか。

ちらりとナユが目に入ると、一人のオタクがナユのお尻を触ろうとしていた。

「あっ……」

僕が声を発するとほぼ同時に二つの影がそのオタクに向かって蹴りをして、足を寸止めした。

「な、な……」

「空閑^{くが}ちゃんにセクハラはダメだよ」

「離れないと次は止めないよ」

いち早く動いたのは刹那と瑠香さんだったみたいだ。
ただの傍観者じゃなかったみたいだな。
てか看護師が武力行使をしていいんですか。

「ひ、ひいっ」

こうして一人のオタクが退場していった。
この調子で減っていつてくれればよかったが、女性陣は一步も引かなかった。

「私たちも写真を撮ろっ」

「あ、それいいねえ」

「アタシと撮ろうよっ」

……撮ってもいいから引張らないで……苦しい……

「はいはい。アンタたちっ。コイツも一応入院患者だからもう少し

優しく扱ってやれ」

そう言ってくれたのは意外にも瑠香さんだった。
ちゃんと看護師としての仕事をしてくれた。

「そうなの〜？」

「じゃあ順番に写真を撮ったら終わりにしようか〜」

「た、助かった……」

「アンタも早く写真を撮って終わらせな」

「あ〜い……」

「ねえねえ。手を丸めてニヤ〜って言ってよ〜」

「にゃ、ニヤ〜……」

「「キヤ〜ッ。かわいいー」「」

何がかわいいんだか……僕には理解できない。

こんな男が女装して猫のマネをしているのがそんなにいいのかな。

それから何とか一時間弱で僕らは解放され、病院一周の罰ゲームを何とか生きて終わらせられた。

第二十五羽 再勝負

コスプレの服を着たまま僕たちはナユの病室に集まった。着替えたいと主張したが、三対一の多数決で負けた。なぜ四人かと言うと翼つばさが無投票だったためだ。

「二人とも人気者だねえ」

「死ぬかと思つた……」

「自分は儲かつた」

「那由多なゆた、アンタそんなに金をもらつて使うのかい？」

笑顔でお札を数えるゴスロリ美少女つて絵が変な感じがした。

「もちろん。本とソラを飛ぶための材料費に」

「そつかそつか」

材料費については追求しないほうが今はいいだろう。

「んっふっふっ私も今日はいいいものが手に入ったにや」

刹那せつなはデジカメを取り出してなにやら撮つた写真を確認していた。後ろからそれを覗き込んでみると……

「ちよっ……消せっ」

「いやだよ〜ん」

刹那のデジカメラに撮られていた写真は、僕が招き猫みたいに手を丸めているところだった。

「これを引き伸ばしてポスターにするのさ〜私の部屋に幸運を招き入れる招き猫になってもらうのだ〜」

「やめてくれ……」

刹那ならやりかねない。

いや、確実にやるだろう。

「私の要求を呑んでくれたら考えてあげないこともないかな〜」

「……何？ どうせロクな要求じゃないでしょ」

「ん〜簡単なことだよ。ネコっちが私の作った服を逃げずに永久的に着てくれれば」

「……遠慮します」

永久的にこんな服を着せられ続けるなんて耐えられない。

中学時代のトラウマが再び起こる恐れがあるぞ。

……まあ逃げられる確率は野球選手の打率くらいですが。

「自分もコウのコスプレ、見てみたいな」

「そんなこと言ってもしないぞ」

今、ここにいる味方は翼だけだろう。
いや、翼は永世中立かもしれないな。
ということは、僕は一人か。

「……ひよわっ」

突然胸部に衝撃がはしった。

何かと思ったら僕の刹那が後ろに手を回してブラジャーを外した
みたいだった。

「な、何するんだよ……地味に痛いし……」

「いやいや、ネコっちが隙だらけだからささ、弄りたくなるのさ」

「ああ、それわかるかも」

「自分もわかる」

ちよつと待て。

何で女子三人が同意するんだ。
僕は何でそんな弄られるんだ。

「とりあえず、これ、外すよ」

ようやく胸部の締め付けから解放された。

女性はよくこんなものをつけて一日耐えられるなあ……
僕が女だったら耐えられないだろうな。

「今は……三時半か」

「コウの友達は五時までには帰ってくれよ?」

「は〜い。じゃあまた麻雀しよ〜」

「賭けもちろんな……」

「あり、でしよ〜?」

刹那に先を越された。

こうなると絶対に逃げられなくなるのだ。

「じゃあせめて麻雀はやめてくれ……僕が不利」

「仕方ないな〜ネコっちはわがままなんだから〜まあ今日は衣装があつたから麻雀は持って来れなかったけど。空閑^{くが}ちゃん、翼、何かやりたいのある?」

「僕は特にないな」

「自分は……トランプがやりたい」

「じゃあトランプにけつてーい」

今回の僕の沽券がかかった勝負はトランプになったようだ。

第二十六羽 ソラ飛ぶ理由

今回の結果は……

「あつちやく……負けちゃったか」

神経衰弱で刹那せつなの負けだった。

刹那はこういう記憶系のゲームは苦手らしく、助かった。
二回連続でアレはキツイ。

「でも私がコスしてもいつもどおりだしな〜人様に見せてるし」

「じゃあ一日、コスプレをしたまま僕らの言うことを聞くってのは？」

「ナイスアイディアだね〜あ……えちいのはダメだよ？ネコっち」

「コウってそんな趣味が？」

「誰がするかっ！」

刹那の中での僕のポジションはいつたいたいどうなっているんだ……
ナユも疑うような目で僕を見ないでくれ。
そんな性癖はない。

「あつ。もうこんな時間だ。私たちは帰るね〜」

「また来週ね」

「あとは二人でね……空閑ちゃんに手を出しちゃダメだよ？」

「誰が出すかつ！」

だからナユも疑うような目で見つめないでくれ。

刹那と翼が部屋を出て行って静寂が訪れた。

なんだか急に寂しくなった感じだった。

「……帰っちゃったね」

「うん。刹那のヤツがいなくなるとだいぶ静かになるなあ」

「コウは戻らないの？」

「まだ少し時間もあるし大丈夫だよ」

ちよつと夕暮れを見ていきたいしね。

最近ここで夕暮れを見るのが日課になってきた。

あまり遅くなりすぎると瑠香さんにスリッパで殴られるが。

「……ねえ……自分ってあとどれくらい生きられるのかな……」

「えっ……」

ナユの今まで聞かれたことのない問いに思わず驚いてしまった。

ナユの顔を覗いてみると夕日に照らされていて赤くなっていたが、顔色は暗かった。

「コウたちと会ってから元気にはなってきたけど、決して何年も寿

命が延びるわけじゃない。せいぜい一、二年だよ。死ぬまでにソラを飛べるのかな……」

「……大丈夫だよ」

何の根拠もなかったけど口が勝手にそう動いていた。

ただの気休めにしか聞こえないかもしれないつまらない言葉。

「大丈夫。ナユが強く飛びたいって願ってれば飛べるよ。神様が叶えてくれなくても僕が……いや、刹那たちに言ったらあいつ等だつて手伝ってくれる。僕たちがナユを飛ばしてあげるよ」

「……本当？」

「うん。そういえば今更だけど、何でそんなにソラに飛びたいの？」

初めて会ったときから気になってはいたがなんとなく聞けず聞いた質問。

今なら聞いていい気がする。

「理由？ ……コウになら言ってもいいかな。お母さんから聞いた話なんだけど、お父さんはパイロットだったの」

「へえ……すごいね」

寝ていたときはパパって言ってたのに今はお父さんなんだなあ。

「うん。で、お母さんはキャビンアテンダントだったの。二人はそこで知り合って、付き合い始めたらしいの」

「よくある話だね」

「それで自分は二人が見ていた風景を見てみたいの。ソラからの風景を眺めてみたい」

「なるほど……」

そんな深い理由があったんだな。
ただ無意味に飛んでは落ちを繰り返しただけじゃないのか。
思わず涙が零れそうになった。

「僕が退院しても何とかして飛ばせてあげるよ」

「……じゃあ信じてる」

ナユはそう呟いてようやく暗い顔を笑顔に変えてくれた。
やっぱりナユは笑っている方がいいな。

いつもパシリにされていることを忘れそうになるくらいにいい笑顔だな。

「もう、こんな時間だ」

「日が暮れちゃっつね」

「じゃあまた明日ね」

「っつね」

病室を出ようとしたときに、今まで忘れていたことを思い出してしまう。

着替えていなかった。

僕はフリフリのメイド服、ナユはゴスロリファッションのままだった。

しかも僕の初め着ていたパジャマはどこに……

「……ねえナユ。僕の服……知らない？」

「んん〜……確かコウが着替え終わってから自分のベッドの上に置いて……」

「そこまでは覚えている」

その先、なんだか嫌な予感が頭によぎったが当たらないことを祈りたい。

「刹那が『ネコっちのパジャマを持って帰れば……にゅふふ』とか言いながらリュックに詰め込んでたかな？」

「な……っ！」

こんなところでDSっぷりを発揮しないでくれ……
つてことはこの格好のまま病室に戻れと……

しかし帰らないわけにもいかないので仕方なく病室の方に足を進めた。

ちなみに視線を気にしながら歩いていったために病室に戻るのが遅れ、瑠香さんにスリッパ攻撃を喰らった。

それだけならまだしも、向かいのベッドのオタクにしつこく色々聞かれて疲れた。

今日の出来事は忘れられない出来事の一つになるだろう。

女装のことも、ナユから聞いたことも。

第二十六羽 ソラ飛ぶ理由（後書き）

久々の『ソラノヒト』を更新です！

ちよつとシリアス（？）な話にしてみました！

しかし最後にはオチが……（笑）

これからどうするかは考え中なので短い期間で更新できるかどうか

……

長い目で見ていただけるとありがたいです！

第二十七羽 従姉

入院生活も二週間以上経ち、生活には慣れてきたけど、楽しみがナユに会うことだけになってきていた。

ナユに会っていない時間は何故か向かいのオタクがうるさい。

そんな長い名前を聞いても何がなんだかわからないし……

まあ言っていることは大体わかった。

『長つたらしいキャラクターのコスプレをして欲しい』と言つてとだ。

誰がするかっ。

「だからして欲しいんだよお」

「……」

こつというのは無視するのが一番いいのだ。
静かになるまで無視しよう。

「これだけでいいからっ」

「……」

無視無視……

コスプレオタクは刹那^{せつな}だけで十分だ。

「やほ〜紅^{こゝ}ケン」

「……」

「むう〜こんな美人なお姉さんが声をかけているのに無視するのね」

なんだか聞いたことある声が……

入り口の方を見てみると見知った顔があった。

色素の薄い金色の長髪で、程よく整った顔でつり目気味の目と僕の目が合う。

「リコ姉っ。何でここに？」

「藍さんから聞いてさ〜午前中に講義が終わったから寄ったのよ」

彼女は東狐衣莉子。

僕のいとこのお姉さんで、小さい頃から僕の世話をしてくれている人だ。

「てか、自分で美人って言うんだね」

「だって事実でしょ〜？」

いや、僕の周りには美形が多すぎて、リコ姉は中の上ぐらいの位置になっている。

まあ一般人から見たら美人の部類に入るのかな。

僕のそこら辺の感覚は一般とずれているのであてにならない。

「ん〜普通じゃない？」

「ひんどいなあ〜あんなに紅クンを可愛がってあげたのに」

「それに関しては感謝のみで」

「ふう〜」

二十歳の人が頬を膨らまして上目遣いで見つめてきてもなんとも思わない。

「こういう反応の仕方って遺伝するのかな。」

リコ姉と、母さんの双子の姉、桃香とうかさんの反応と似ている気がする。

母さんと桃香さんは顔も性格も行動もそっくりだ。さすが一卵性双生児。

「で、何か用でも？」

「紅くんが暇にな〜って思って、暇つぶしに協力しようかと」

「猫羽ねしま氏のお姉さんですかい？」

僕とリコ姉が話しているとリコ姉の後ろから向かいのオタクが声をかけてきた。

「ん？ どちら様？」

「わたくしめは猫羽氏のファン……」

「ただの同室の人だよ。そんなに息を荒くしていると治るものも治りませんよ」

オタクがファンと言う前に僕が邪魔をした。

さっさと自分のベッドに戻って欲しい。

「私は紅クンのいとこの東狐衣莉子。よろしくね」

ニコリと営業スマイルをオタクに向けるリコ姉。
てか僕、このオタクの名前知らないなあ。
知りたくもないけど。

「ちょっと私、紅クンと話しているから邪魔しないでね」

「わかりましたっ」

勢いよく自分のベッドに戻っていくオタク。
リコ姉の顔を見てみると、冷めた目でオタクの背中を見ていた。
この人は本当に興味のないことにはとことん冷たいなあ。
しかし僕と目が合った瞬間に温かい目に戻った。

「邪魔者は消えたし、何話そっか？」

「リコ姉、もうちょっと他人にも愛想よくしたら？」

「めんどい。私は紅クンと話したいのよっ」

「さよけ」

「ねえ紅くうん」

甘ったるい声を出さないでください。
頬擦りも、しないで欲しい。

何で僕の親族は必要以上のスキンシップをしてくるのだ。

「で、話すって何を？」

「ん〜……風の噂で聞いた、紅クンの彼女候補について？」

「んなつ」

何でリコ姉がナユのことを知っているのだ。

母さんにナユの事を話していないし、リコ姉は刹那たちとはそれほど交流はないはずだ。

「ん〜？ 何で知っているか知りたい？ それは親切な看護師さんがいたのさ」

「……その看護師さんの名前って……」

「確か猿……何とかさん」

おそらく瑠香るかさんのことだろう。

あの人は本当に僕の情報を他人に漏らすな。
今度会ったら言いふらさないように言っておこうかな。

「で、誰なのよ〜紅クンの彼女さんは〜」

「リコ姉の知らない人だよ。それに彼女じゃないし」

「ええ〜そんなこと言われると見たくなくなるな〜」

「そんな簡単に会えるわけな……」

「コウ、もうお昼よ」

リコ姉の後ろから声をかけてきたのは、話題のナユだった。時計を確認すると針は十二時を示していた。なんてタイミングのいい世の中だろう。

「はいはい」

「ほお〜キミが紅クンの〜」

「ん？ ……だれ？」

「私は紅クンの愛人の……」

「誰が愛人だっ！ ただのいとこのリコ姉だよ」

まったく……油断も隙もありやしない。

「リコ姉？」

「東狐衣莉子。名前の後ろから取ってリコさ〜あなたは？」

「自分は空閑^{くが}那由多^{なゆた}です。コウのせいで腕を……」

「骨折はナユのせいだからなっ」

勝手に骨折の原因にするな。

重力に人間が勝てるわけないのはわかるだろ。

いくらソラが飛びたいからって道具なしで窓から飛び降りるなんて普通はしない。

「那由多ちゃんか〜こんな可愛い妹が欲しかったな〜」

「リコ姉は一人っ子だからね」

そんなことを話していると、突然くうくとお腹が鳴る音がした。僕じゃないですよ。

「リコ姉？」

「いんや〜お腹は空いているけど、早弁しているから鳴るほど空いてはないさ〜」

「じゃあ……？」

顔を赤くしながら俯いているナユだった。

今の音はナユの音か。

「だ、だって……朝はそんなに食べないし……コウが遅いし……」

「僕を待つてないで自分で食べればいいのに。じゃありコ姉、僕は用事があるから」

「へいへ〜い……那由多ちゃんに手を出しちゃダメだよ？」

なんでだ〜っ。

僕ってそんなに軽々しく手を出すように見えるのだろうか。

入院生活二週間で三回も別の人に言われた。

もちろん異性に手を出したことなんて生まれてから十七年、一度もないのだが。

にへらにへらと笑っているリコ姉を病室に残してナユの病室に向かう。

病室を出る直前にオタクがリコ姉に近づいていくのが見えたが気にしない。

第二十七羽 従姉（後書き）

新キャラクター登場です！

東狐衣莉子……こんな苗字の人が実在するのかとお思いの人がいる
かもしれません！……実在しますw

てか『ソラノヒト』の登場人物の苗字は全て、実在している苗字で
すよ！

どうしてネコっちは『猫羽』で『ねこま』と読むのだから……
苗字って面白いものがいっぱいありますよね！

ちびちびと更新していくので長い目でよろしくお願いします！

第二十八羽 不安

「にゃ〜……今頃ネコっちは何をしてるんだろな〜……空閑^{くが}ちゃん
とイチャついているのかな〜……」

今は昼休み直前の授業。

午後には授業と部活があるために、ネコっちのお見舞いには行けない。

「……であるからして〜……」

世界史の教師の呪文のような言葉。

私の耳に入ってきているが、脳を素通りして逆の耳から抜けていってしまう。

次のテストは大丈夫かなあ……
翼^{つばさ}に教えてもらおう。

苦痛な一時間が過ぎると聞きなれたチャイムが鳴り響いた。
これでようやくお昼の時間。

「ねえ刹那^{せつな}〜一緒に食べよ？」

「あ、うん。いいよ〜」

いつも仲良くしているクラスメイト達が私の周りに集まってくる。
それでも私は人気者なんだよ？

みんな、近くにある机を円く並べて、各々のお弁当を広げる。
私も自分で作ったお弁当を広げて箸をつける。

箸を動かしてお弁当を食べながらふと、ネコっちと空閑ちゃんのことを考える。

確かこの時間は病院の昼食の時間だったはず。
私も好きな人にあーんってしてもらいたいなあ……

私の好きな人……ん……

そっこの深く考えたことなかったからなあ

ネコっちは幼馴染の親友だし、翼も同じ感じ。

それにしても何で私、こんなにネコっちと空閑ちゃんのが気になるんだろうか。

「……え。……ねえってば」

「ふえ？」

「刹那ちゃん聞いてた？」

「あ、ご、ごめん。ちょっと物思いに耽ってた」

「刹那が物思いい〜？ 似合わねー」

「ぶう。私だって物思いくらいしますう〜」

頬を膨らまして拗ねると何故だかみんなに笑われる。

まあ嫌な笑いじゃないからいいんだけど、何で笑われてるんだろ？
そんなにおかしなことをしたつもりはないんだけど。

「刹那の顔から推測するに……恋の悩みですか？」

「ち、ちがうわよつ。私には好きな人とかいないし……」

「……この娘、ホントに天然だわ」

む、何か悪口を言われた気がする。

まあ優しい私は気にしないでおいてあげようではないか。
ん？何か文句ある？

「ま、いい恋ができるように精進しなよ？」

「そういうマコはどうなのさ？」

「アタシはカレとラブラブだからいいのよ」

マコは彼氏がいて羨ましいなあ……

私だって作ろうと思っただらいつだってできるもんつ。

「クラスの男子は何でこんなに美人な刹那をほっておくのかねえ？」

「え、私は美人じゃないよ」

「アンタを美人と言わずに誰を美人と言うつ。アンタは自覚しなさいっ」

むう……怒られた。

そんなに美人なのかなあ。

自分の顔は自分では直接見れないからよくわからない。
鏡で見る自分も本当の自分であるかはわからないし。

「最近の男子は草食系だからチキンなのよ」

「そうかな？ まあ私はまだ、恋はできなくてもいいし、私にはコスプレと言う恋人がいるっ」

「それって猫羽ねじまクンに着せるヤツ？」

「もちのろんさ、何ならマコたちのコスも作ってあげるよ？」

「いや、遠慮します」

拒否られた。

マコはスポーツやっててスレンダーな体型だから絶対にチャイナ服とか似合うと思うのに……

私の頭の中で妄想が膨らむ。にゅふふ……

「……刹那って性格が残念だね。顔はこんなにもいいのに」

「どっこういうことさ？」

「サドでコスプレオタクってこと」

「佐渡でコスプレ？そんなところでコスプレ大会はないよ」

「……多分、字違ってるから。それにコスプレって大会があるんだ」

あ、ばれた？

コスプレは見せ合ってるなんぼのものだからね。

コスプレ界じゃ私は有名人なのだ。

「猫羽クンと付き合ったらどうなのよ？」

「ね、ネコっちはただの幼馴染だよ。それにネコっちには空閑ちゃんがいるし……」

「空閑ちゃん？ 誰、その子？」

「ネコっちと同じ病院に入院している可愛い娘だよ。写真もあるよ」

「こないだデジカメで撮ったネコっちと空閑ちゃんの写真。手を丸めている空閑ちゃんの写真をマコに見せる。」

「……この娘も刹那の毒牙にかかったか……でも可愛い娘ね」

「毒牙って何よ〜人間短い人生で自分に似合う服を着ないと〜」

「それにしても猫羽クンとその空閑ちゃん、一緒にいるってシチュはまずくない？」

「どゆこと？」

私がマコに尋ねると真剣な顔で言うてくる。

「猫羽クンだってあんな可愛らしい顔をしてても一応男の子だよ？ そりゃ何かの間違いがあつて……」

「ね、ネコっちはそんなことしないよっ」

「どうだかね〜」

「おら〜もう授業始まるぞ〜弁当箱しまっけて席に着け〜」

「うわっ。もうこんな時間っ」

慌てて弁当箱をしまっけてみんなそれぞれの席に戻っていく。

ネコっちが空閑ちゃんに手を出す……

そんなことはないはず……

今日は部活をサボって見に行ってみようかなあ……

第二十八羽 不安（後書き）

初めて視点を紅君から刹那ちゃんに変えてみました
恋する乙女……なのかな？

鈍い人はとことん自分の気持ちにも気付かないですよね
自分もとことん鈍い人の部類なので全然気付きませんw
まあそれ以前に人に好かれていないかもしれないかもしれませんが

第二十九羽 救助

「あゝむ」

「てか、そろそろ骨折治るんじゃない？」

「んむむむん〜」

「……ちゃんと飲み込んでから話さない」

「んむ」

今日もいつものようにお昼を食べさせてあげる。

「あと一週間ぐらいで治るって猿渡さるわたさんが言った」

「そうか」

あと一週間でこの恥ずかしいのは終わるんだな。
うれしいような寂しいような。

「コウがやりたいなら治ってからでもいいわ」

「誰がっ」

「そう。ならいい」

「……ナユがして欲しいって言うならしてもいいけどね」

「べ、別にして欲しいなんて言っていないわよっ」

もうちょっと僕の前だけでもいいから素直になってもらいたいのだ。

「それより早く食べさせて」

「はいはい」

今は気にせずにナユにご飯を食べさせてあげるかな。

ナユに全部食べさせてあげてから自分の食事を取る。

僕が食べている間はなぜかナユが僕をじっと見つめている。

なんだか一週間で見つめられるのにも慣れた。

慣れてって恐ろしいね。

「やほ、紅クン、那由多ちゃん」

突然ドアが開いたかと思うと、そこにはリコ姉がいた。

「んぐっ……な、何でリコ姉がっ」

「いんや、紅クンが那由多ちゃんに手を出していないかちょっと心配になってさ、何もなさそうで一安心」

……本当に僕って信用されていないんだなあ……

そんなに信用を失うようなことを一回もしたことがないんだけど。

もしかしたら物心がつく前にリコ姉に何かしたのかな？

いや、それはないはず……

「まあ紅クンが気になったのもあるけど、那由多ちゃんと話したいな〜と思ったからさ」

「自分？」

「そうそう。こんな可愛い子をスルーするほど私は甘くないのさ〜」

「あう……」

リコ姉に可愛いと言われて、顔を赤らめて俯くナユ。

これは見ていると面白いかもな。

ちよつと傍観者になってみようかな。

それにしてもリコ姉が初対面の人にこれほど興味を持つのは珍しいな。

大抵は作り笑いを見せて、軽くあしらうのだ。

「ねえねえ〜私、那由多ちゃんのことを知りたいな〜」

「えつと……その……」

ナユがこつちに助けを求めてくるが、敢えてそれを僕はスルーをする。

おどおどしているナユを見るのは楽しいな。

普段と違うナユが見れるのはいいなあ。

「うう……」

「おしえておしえて〜」

「な、なにから……」

「ん〜どうしよっか〜まずはあれも知りたいし、これも〜……」

「あうう……こう〜……」

可愛らしい声を上げながら僕に助けを求めてくるナユ。
上目遣いでそんな風に言われると恥ずかしいではないか。

「しょうがないなあ……リコ姉、その辺にしといてあげなよ」

「それとそれと〜……ん？ 何よ〜」

「ナユが困っている」

「むむ〜紅クンがそう言うなら仕方ないわね〜」

ようやくリコ姉から解放されたナユは肩を撫で下ろしていた。
今度何かお礼でもしてもらおうかな。

「ふう………」

「じゃあ三人でお話しましょ〜」

それから僕も話に加わって、ナユのこと、リコ姉のこと、僕の過去をお互いに話した。

第三十羽 恐怖再び

三人で話していて、気が付くと二時間ほど経っていた。

「あ、もうこんな時間か。何かおやつでも買ってくる？」

「いや、僕らは間食とかあんまりしちゃダメだから」

「残念だなあ……じゃあちよつと下の売店で自分のを買ってくるから二人でどうぞ」

そう言っつてリコ姉は部屋を出ていく。

「明るい人だね。衣莉子えりこさん」

「まあ、明るすぎるのが問題だけだね」

リコ姉が出ていっつてから僕たちは次の休みの刹那せつなへの罰ゲームについて話した。

「次の日曜は刹那の罰ゲームかあ……」

「コウは何をさせるつもりなの？」

「そうだなあ……特にこれと言っつてないけど、前の日曜日に僕がやったことをやっつてもらおうかな」

「自分は本を買っつてきてもらおうかな。翼つばが持っつてきてくれた本、もう読み終わりそうだし」

「それはいいかもね」

僕たちがそんなことを話していると突然ドアが開けられた。

「リコ姉、やけに早……刹那っ」

「やつほぐなんとなく来ちゃった」

「部活はどうしたんだよ」

「今日はおさぼりなのだ〜ま、元々そんなに活発な活動はしていないし」

ドアのところにはいたのはリコ姉ではなく、刹那だった。
時間はちょうど授業が終わってから二十分ほど経った時間だった。

「何よお〜私か来ちゃまずいことでもしてたのぉ？」

「そんなことはしていないけど……」

「じゃあいいじゃないさ」

「こんにちは、刹那」

「空閑^{くが}ちゃんは相変わらず可愛いわね」

「そ、そんなことはないわ」

そう答えるナユの頬は少し赤かった。

「やつほほ〜い。リコ姉のお帰りだ〜い……およ？刹那ちゃんじゃないかね？」

「あ、リコさん。お久しぶりです〜」

「相変わらず、コスプレしてるのかい？」

「バッチリですっ あ、この前のネコっちの……」

「ワーツワーツ」

それだけは言わないでくれっ。もう一生自分の記憶から消し去りたいことだから。

……まあ無理だけど……

「^{ニム}紅クン、うるさい」

「むぐ」

そう言っつてリコ姉は僕の口を塞いだ。

「で、刹那ちゃん。紅クンが……？」

「まあまずは現物を見たほうが早いですよ」

「むぐぐむーっ」

せめてもの抵抗をするが、リコ姉に頭を叩かれて僕は沈黙する。そのあと刹那がデジカメをカバンから取り出し、少し操作をして

からリコ姉に見せる。

見せるのはもちろん先日の写真だった。

「おお〜さすが紅クン　今度この格好して私に奉仕してよ〜」

「むぐっ」

「そうかそうか、やってくれるのね」

「むむぐぐーっ」

誰も肯定なんかしていないっ。

てか首を横に振ったでしょうがっ。

僕が叫んでもがいていると、突然ドアが開かれた。

……………デジャブ？

「うるさいっ」

案の定、そこにいたのは溜香^{るか}さんで、溜香さんのスリッパ攻撃が僕の顔面を直撃する。

「ぶっ……………きゅ……………」

「アナタ、誰よっ。紅クンをいじめていいのは私だけよっ」

いや、アンタもいじめないでくれ……………

「ん……………誰？」

「私は東狐^{いとう}衣莉子よっ。紅クンの愛……………」

「むがーっ！」

僕は無理やりリコ姉の手を振りほどいた。

この人はまた勝手に愛人とか言おうとしたな。

「僕のいところですっ」

「ほお〜彼女がねえ〜コウの周りには美人がいっぱいだな」

その中に貴女が含まれているのには知りませんが、一応否定はしておかない。

後が怖いからね。

「アタシはこんななりだけど一応この病院の看護師さ。よろしくね」

「よろしく。……えっと」

「ああ、アタシは溜香さ。なまわたり猿渡溜香」

「じゃあ溜香さん、そんなに紅クンをいじめないでね？」

「ん〜でもコウっていじめたくなる雰囲気がない？」

「ああ〜わかる気がする」

ちょっと待ってくれ。

誰も僕をいじめないでください……

「ま、いじめはしないでからかう程度にしとくよ」

てか、この部屋には僕をいじめる人しかいないな……
刹那に瑠香さん、ナユにリコ姉……早いうちに逃げたほうがよさ
そうな……

「じゃ、じゃああとは女性たちで……」

「まあ待ちなよ」

そう言うのは刹那だった。

……嫌な予感しかしないんですが……

「ネコつちがこれを着ればノープロブレムさ」

刹那は自分のカバンをあさって取り出したものは……先日着な
ったミニスカのコスプレだった。

「ちょ……ちょ……」

てかなんで学校帰りなのにそんなものを持っているんだっ。

「にゅっふっふっ逃がさないよ〜ん」

ドアから逃げようとそつちを振り向いたがそこには瑠香さんが立
っている。

流石にあれの横は抜けられなさそうだ。

そしてリコ姉はニヤニヤと笑っているだけ。

ナユはくつくと笑いをこらえていた。

「いやだーっ」

なんでもないこの平日が忘れられない一日になりそうだ……もち
ろん、悪い意味で。

第三十羽 恐怖再び（後書き）

久々の『ソラノヒト』更新です！

待ってくれていた人たちはお待たせしました。そうでない方たちはぜひこれを機にw

さてはて、今回の話で完全に猫羽少年はいじられキャラ確定ですw
紅君のコスプレ姿を誰かに描いてもらいたいですね！w

で、今回の話を書いていてふと思ったことなんですが、『男が女装して生活』と『女が男装して生活』、どっちの方が長くごまかせるんですかね？

『女が男装』の方は『はなきみ』ですかね！

『男が女装』の方は思いつきませんが
実際は可能なんですかね？可愛らしい男子、かつこいい女子はいっぱいいますけどその人たちができるのかな？って思いますw

話の内容とは特に関連性はないですw

では今回はこの辺で！ノシ

第三十一羽 毎度恒例の……

「うう……死にたい……」

できる限り足掻いてみたが、刹那せしなとリコ姉のタッグに僕が勝てるわけがなかった。

てか、一対二つてずるくない？

いくら男対女でもさあ……

「まあいいじゃんさ〜似合ってるんだから〜」

「……男としては似合いたくない……」

「じゃあこれを機に女の子として……」

「無理だーっ」

「おいおい、そんなに暴れるとパンツが見えるぞ?」

「っ!?!?」

瑠香るかさんにそう指摘されて思わずスカートを手で押さえてしまった。

……反射って怖い……

「……てかできるならもう少し長いのにしてよ……」

「それは聞けない願いだなあ〜私が今聞いてあげられる願いは『獣耳追加』か『パッド入りブラ追加』くらいさ〜」

刹那はそう言ってカバンの中から先日つけた獣耳とブラを取り出した。

「いや、どっちもつけませんから。」

「いや〜それにしても紅^{にじ}クンは昔^{むかし}から女装が似合^{にあ}うよねえ」

「……………」

そう、幼い頃はリコ姉の着せ替え人形と化していたのだ。

それでようやく解放されたと思いきや、刹那がその道に目覚めて今度はそっちの着せ替え人形に……………」

家の中でするだけならまだよかったが、それを着て外に連れ出された日には死ぬかと思った。

本当に知り合いに見つからなくてよかったと思う。

「やっぱりこれを機に女の子になろうよ〜ネコっちなら整形しなくても大丈夫だよっ」

「いや……………僕は男としてこれからも生きていきます……………」

それから四人は僕の過去についてどんどん話を進みだした。

幼少期の事は主にリコ姉が、小学校以降の事は主に刹那が話して瑠香さんとナユは笑いをこらえながら聴いていた。

……………帰っていいなら帰りたい……………」

「いや〜刹那ちゃんがコスプレに目覚めたときにはうれしくて泣きそうになったのを覚えてるよ〜」

「……………僕は別の理由で泣きたい……………」

僕がぼそりとつぶやいたが、ことごとくスルーされた。

しばらくすると瑠香さんは笑いがこらえられなくなったのか、声を上げて笑いだし、ナユの奴も布団に顔をうずめて笑いをこらえていた。

「そんなに笑わなくてもいいじゃないですかぁ……………」

「わ、悪い悪い。コウの過去があまりにも面白くてな」

「これのせいで苦労したんですから……………コスプレさせられた状態で外に出て……………知り合いや後輩に合わないか心配でしょうがなかったですよ。それに中学では同性にコクられるし……………」

「ぶはっ。お、思い出させるなよっ。アハハッ」

「……………帰っていいですか……………」

「ネコっち、そのままの格好で帰るのぉ？」

「う……………そ、そうだ。こないだの服はどこにやったっ」

「ん？ あれは藍ちゃんにちゃんと返したよ？ネコっちが忘れていった〜って言ったらありがと〜って言われちゃった」

……………刹那め。

人の服を盗んでおいてお礼を言われるとはひどすぎる……………

てか僕の母親はどうしてパジャマを忘れたと言われて信じる……………

病院内のパジャマをどこでどうすれば忘れるのだろうか。

「まあそんなに着替えたいなら妥協策を出してやるっではないか」

「ん？ ブラをつけろっって言われても拒否します」

「大丈夫大丈夫。そんなひどいことしないから」

「……今までそう言われて何度ひどい目にあっただことか……」

「今日のは本当に妥協策だよぉ？」

「……一応聞いておこうか」

僕がそう言うと刹那は紙袋の中身をガサゴソと探り、先ほど見せた獣耳を取り出した。

「これをつけてニヤァって言ってくれれば満足さ」

「う……」

それは迷いどころだ。

これだけいるところではやるのは何だが、早くこの姿から解放されたい……

「紅クンのにゃんこ姿をみたいなあ」

「うう……」

「どうするかはネコっち次第だよ」

そんなことを言いながら刹那は僕にネコ耳を渡してくる。

ふう……これをどうするべきか……

さっきから腹を抱えている瑠香さん、口元を布団で隠してこちらを見ているナユ、ニヤニヤと笑っている刹那とリコ姉……

「や、やればいいんだろつ。……にゃ、にゃあ……」

「よしよし。今日はこれくらいで許してあげよう」

は、恥ずかしかった……

とりあえず刹那は約束通り、服を返してくれた。

「じゃあ私は満足したから今日はこの辺で。刹那ちゃん、また良いブツが入ったらよろしくねえ」

「あいさ〜」

……良いブツとは何なのか、言及するのはやめておこう。

なんだか聞いてはいけない気がする。

とりあえず僕は近くのトイレで着替えるために部屋を後にした。

第三十一羽 毎度恒例の……（後書き）

超久々の更新ですみません

なんだか書く暇がなくて……

これからかなりスローペースのマイペースで書いていくと思うので、読んでいただいている方々にはお待ちさせることになると思います
がご了承くださいm（　　）m

どうでもいい話ですが、男みたいな女の子と、女みたいな男の子、
どちらの方が同性に需要があるんでしょうね？w（マテ

第三十二羽 睡魔

僕がナユの病室に戻ると刹那の姿はなく、眠たそうに目を擦っているナユとイスに座って本を開いている瑠香さんだけだった。

「あれ？ 刹那は帰ったんですか？」

「ああ、確認が終わって満足したから帰るって言って帰ったぞ」

「確認？」

「アタシも詳しいことは知らん」

そう言うつと瑠香さんは視線を本に戻した。

なんだかいつも力で何とかしようとしている人が本を読んでいる姿が不思議な感じがした。

「何の本を読んでいるんですか？」

僕が声をかけると再び視線を僕に向けてくれた。

「ん？ これかい？ 那由多なゆたに読みやすいからって勧められてな」

「へえ……どの本です？」

「まだ最初しか読んでないけど、なんだか兎が出てきたな」

「ああ、あれですね。確かにそれなら読みやすいですよ」

毎日のようにナユに読み聞かせをしていたから本の内容は大体覚えてる。

僕がそう言うと瑠香さんはうれしそうに笑ってから「そうかい」と言って視線を本に戻した。

僕は眠そうに目を細めているナユの隣のイスに腰を下ろすと、ナユは僕のパジャマの袖を掴んできた。

「ん？ 何？」

「眠い……」

「じゃあ寝ればいいじゃんか」

「……こっち来て」

ナユは力なくベッドをポンポンと叩いた。

その意味することはもう理解した。

『横に来い』だ。

「はいはい……」

反抗するのも無意味なので僕はほぼ定位置となりつつあるベッドに腰を下ろした。

僕が腰を下ろしたのを確認してナユはベッドの中でもぞもぞと動いて、頭を僕の腿の辺りに乗せてきた。

……えーっと、これはいわゆる……

「膝枕ですかい……？」

「むむむ……」

「……っってもう寝てるしっ」

少しくらいは抵抗を感じないのかな……この子は。

瑠香さんは本に集中しているので暇だ。

手が届く範囲に暇つぶしの物もなかったからすることがない。

「せめて本くらい取らせてくれよな……」

大変暇なので寝ているナユを弄ることにした。

頬をつつくたびに、もぞもぞ動くのが面白い。

何度かつつくとナユが僕の手を払ってきた。

「起きてるんですかー？」

「うむむ……」

もぞもぞ動いて腿がくすぐったかった。

ナユは嫌そうに眉をひそめていたので頬をつつくのはやめて頭を撫でてあげた。

すると今度は気持ちよさそうな顔になった。

「本当に感情の起伏が激しいですねーいつも大人しければいいのね」

「ふああ……」

ナユを撫でるのを止めて、欠伸のした方へ視線を向けると目を擦っている瑠香さんがいた。

やっぱり普段本を読まない人がそう言う類の物を読むと眠くなる
んだろうか？

「つまらなかったですか？」

「いんや。内容は面白いんだが……文字ばかりだからなあ……ふ
ああ……」

瑠香さんは口元を軽く隠しながら大きな欠伸をもう一度した。

「……ちよつと寝る」

「それって職務怠慢じゃ……」

僕の反論は無視して瑠香さんは本にしおりを挟んでから立ち上がり、イスの上に本を置いてナユのベッドに腰を下ろした。
ベッドが少し揺れたがナユが目覚める気配は全くしなかった。

「んじゃ二十分後に起こして……」

瑠香さんはそう言い残してベッドに倒れこみ、寝息を立て始めた。

「もおー……」

二人に囲まれ身動きが取れないんですけど……動けなくてするこ
とがない。

それにしてもこの二人は本当に気持ちよさそうに寝るなあ……

「ふあ……やば……」

他人の欠伸は欠伸を呼ぶ。

それを言った人は的を射ていると今日改めて思った。
つまりだ、僕は今無性に眠気に襲われて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6155j/>

ソラノヒト

2010年10月16日13時49分発行